

古代東北アジアにおける馬具の製作年代

——三燕・高句麗・新羅——

諫 早 直 人

【要約】 近年、東北アジア各地から出土する馬具を一連の系統として理解する研究が盛んにおこなわれている。しかし、各地から出土する馬具の併行関係や年代観については未だ意見の一致をみていない。そこで本稿では、製作技術と機能という観点から、三燕・高句麗・新羅地域出土馬具の相對編年と併行関係について検討をおこない、紀年墓などから出土した良好な年代決定資料をもとに各段階におおよその年代を与えた。技術や機能の変化を広域編年の指標とすることによって、各地の様々な事象が整合的に説明できることが明らかとなった。一方で鏡板轡をはじめとする裝飾性の高い騎乗用馬具セットの成立時期には、前燕（四世紀中葉）、高句麗（四世紀後葉～五世紀初頭）、新羅（五世紀前葉～中葉）と若干の時期差が認められ、その背景には活発な地域間交流だけでなく、各主権の政治的意図が強く反映されている可能性を指摘した。

史料 九一卷四号 二〇〇八年七月

はじめに

三一六年の西晋滅亡から、四三九年北魏の太武帝による華北統一に至るまでの時期を中国史では五胡十六国時代と呼ぶ。この中原の混乱の余波を受け、五胡十六国の強国だった三燕^①と国境を接する高句麗はもちろん、百濟、新羅、加耶、そして倭が古代国家形成への歩みを加速化させていく。この時期に騎馬文化が朝鮮半島を経由し、海を越えて日本列島にまで拡散したことは、各地から出土した馬具を通じて窺うことができる（図1）。それらが一連の系統にあり、相互に密接な

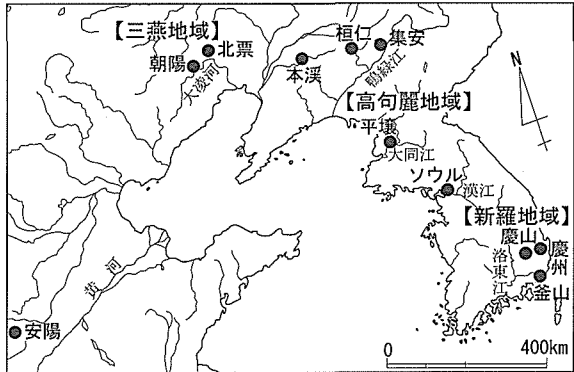


図1 本稿の対象とする地域

関係をもって展開したことについては、各国研究者の意見がおおむね一致するところである。^②しかし、考古資料から騎馬文化東漸の歴史的意義を論ずるには、未だ解決すべき課題が山積している。その最大の問題が彼我の地域から出土する馬具に対する年代観の差である。^③年代論は馬具だけの問題に留まるものでは決していないが、年代決定資料の乏しい四・五世紀の東北アジア各地の暦年代や地域間の併行関係を考える上で、馬具が注目されてきたのもまた事実である。^④

その端緒となったのが、北票馮素弗墓（西官營子一号墓）から出土した一對の鐙である。穴沢咏光・馬目順一は馮素弗墓とよく似た形態の短柄鐙が、倭や新羅にも存在することを指摘した上で、馮素弗の没年（四一五年）を参考に倭や新羅の短柄鐙も五世紀前半のものと考えた。^⑤この年代観は古墳時代中期の暦年代の定点の一つとして広く受け入れられ、同種の鐙が出土する新羅の積石木槨墳や高句麗の積石塚に対する日本人研究者の年代観の拠所となった。^⑦韓国でもこのような日本の研究動向を受け、短柄鐙と長柄鐙は系譜の差に過ぎないとする意見と、

古式（短柄鐙）から新式（長柄鐙）へという変遷観を積極的に朝鮮半島南部に適用する意見が対峙する。両者の見解差は新羅の積石木槨墳の起源や高句麗南征に対する評価、慶州皇南大塚南墳の被葬者比定の差といった歴史観の違いに起因する部分も多いが、いずれにせよこれ以降、馬具が三国時代の年代論においても主要な役割を担うようになった。このように日韓の古墳の年代観と密接に関わってきた馬具の年代的研究の課題は、集安太王陵出土馬具をめぐる桃崎祐輔と李熙濬の論争から窺うことができる。^⑩李は桃崎の馬具編年をそのまま受容しながらも、報告書が王陵比定の前提とした寿陵制を否定することによって、太王陵の被葬者を報告書や桃崎の比定より一代引き上げ、

それによつて皇南大塚南墳に対する自身の年代観の補強を試みた。つまり馬具の相對編年は一致しているにもかかわらず、両者の曆年代観には実に五〇年の差が存在するのである。

以上のように馬具の年代的研究所は、日韓両地域の曆年代観に大きな影響を与えてきた。しかし、定点となる中国東北地方の馬具の年代的研究所は本来曆年代論に先立つべき相對編年に対する検討が不十分であり、点としての紀年墓出土馬具、それも鍔へ過度に依存した議論に留まつている。桃崎と李の見解の相違は、直接的には太王陵の被葬者比定の相違に起因するが、そもそも紀年墓出土馬具をはじめとするわずかな資料と直接対比することによつて年代を導出するという方法論自体が見直しを迫られているともいえる。地域ごとに紀年墓出土馬具も含めた馬具全体の相對編年を確立し、相對編年間の対応關係を明らかにすることこそ急務であり、それによつてはじめて、年代決定資料の乏しい地域の馬具にも安定した年代を付与することが可能となろう。また同時に、年代決定資料は乏しいものの、相對編年が安定した日本や韓國の研究成果は、三燕や高句麗地域出土馬具を検討する際にも大いに参考にすべきと考える。

そこで本稿では、年代論において鍔ほど注目されてこなかった轡を分析の基軸に据え、鍔など各種馬具との併行關係を考慮しながら、製作技術と機能という観点から各地域出土馬具の相對編年とその併行關係について検討し、年代を明らかにする。具体的にはまず、三燕地域と高句麗地域から出土した馬具の相對編年をそれぞれ設定し、紀年墓出土馬具などからおおよその製作年代を把握する。その上で、両地域出土馬具の影響を強く受けたと考えられる新羅地域出土馬具との併行關係を明らかにし、その年代について検討する。なお、紀年墓から導き出される年代は副葬年代、つまりその馬具の廃棄年代に過ぎないとの批判は免れえない。しかし、馬具の製作址は未だ明らかでなく、古墳と山城から出土した資料だけで議論を展開せざるをえない以上、相對編年を組んだ上で、高い精度で副葬ないし廃棄年代を導き出せる馬具と馬具の關係から、同じ段階の馬具全体のおおよその製作年代を推測するという手続きが、現状における最善の方法と考えられる。また、紀年墓を用いて馬具の製作年代を推定するにあたって、一番問題となるのは製作から廃棄までをどのよう

に見積もるかであろう。筆者は当該期の馬具に修理や磨耗の痕跡がしばしば認められること、山城出土馬具や殉葬馬装着馬具などの使用されたことが明らかな馬具と、副葬馬具の間に著しい形態的差異が認められないこと、そしてなによりも当該期において製作技術や機能が大きく変化（発達）していくと考えられることなどから、これらの馬具は使用を前提として作られ、具体的な使用の場合は様々であろうが、その多くは実際、被葬者が生前に使用したと考えている。すなわち、特に追葬を考える必要がなければ、紀年墓出土馬具の製作年代は被葬者の没年より先行する。

- ① 本稿では三燕を前燕（三七―三七〇）、後燕（三八四―四〇七）、西燕（三八五―三九四）、南燕（三九八―四一〇）、北燕（四〇七―四三六）のうち、龍城（遼寧省朝陽市）に都を置いた前・後・北燕の総称として用いる【田立坤一九九一】。

- ② 【蕙高一九九五】、【桃崎一九九九】、【柳昌煥二〇〇四】など。

- ③ 近年、当該期の日韓両地域の併行関係と暦年代観に関するシンポジウムが相次いで開かれ、活発な議論がおこなわれている【国立歴史民俗博物館はか二〇〇六】、【東アジア考古学会二〇〇六】、【釜山大学校博物館はか二〇〇七】。

- ④ 馬具以外にも紀年銘の入った銅鏡や青銅製容器、そして中国陶磁器などが年代決定資料として注目されてきたが、資料数が少ない上に、分布に偏りがあり、それ自体から広域編年綱を組み上げることができない。また、これらは製作地と出土地が遠く離れているものがほとんどで、製作から副葬までの期間が一樣でないことがわかつている。これに対し、当該期の馬具はそれ自体に比較的高い年代決定資料（紀年墓出土資料など）が含まれている上に、各地域で型式学的検討

が可能な程度の資料が蓄積されている。また在地製作か舶載品かは別として、同じ製作技術や機能が複数の地域で一定数確認される点も利点といえる。それらの変化が連動していることが確認できれば、自立性の高い広域編年綱の構築が可能となり、当該期の各地域の年代観を整理する上でも重要な指標となる。

- ⑤ 【穴沢・馬目一九七三】。

- ⑥ 【白石一九八五】など。

- ⑦ 【藤井一九七九】、【小田一九七九】。

- ⑧ 【崔秉鉉一九八三・九二】、【李熙濬一九九五】。

- ⑨ 小野山の設定した新古二形式を朝鮮半島南部に適用した申敬澈は、両形式の間に連続的な変化を想定したが【申敬澈一九八五】、小野山自身は日本から出土する新古二形式の輪鑲について「時代的变化ばかりではなくて、馬具の製作地の違いをあらわしているように思われる」と慎重な立場をとっている【小野山一九六六、五頁】。

- ⑩ 【桃崎二〇〇五】、【李熙濬二〇〇六】。

第一章 朝鮮半島南部における轡と鐙の変遷

本章では主な分析対象となる轡と鐙について、朝鮮半島南部における変遷を整理する。朝鮮半島南部は東北アジアの中でも四・五世紀代の馬具が最も豊富で、かつ相對編年に対する各研究者の理解が比較的一致しており、この地域の馬具に強い影響を与えた三燕・高句麗地域出土馬具の変化を推測する上でも、参考になると考えられる。

1 轡の諸属性と変遷

轡は馬を制御する重要な装具である（図2左）。その重要性から他の馬具に比べて出現時期が格段に古い。筆者はこれまで、全ての轡が共通して備える銜^{はな}の製作技法に注目し、その違いが時期差や系統差の重要な指標となることを明らかにしてきた^①。具体的には轡を構成する部品や属性を連結方法として捉え、各属性の総体として轡を理解する立場から朝鮮半島南部出土の鉄製轡について属性分析をおこない、原三国時代（紀元前一世紀頃～紀元三世紀頃）の轡をⅠ～Ⅱの二段階に、そして三国時代（紀元四世紀頃～六七六年）の中でも馬具が最も盛行する時期にあたる四・五世紀代の轡をⅠ～Ⅲの三段階に区分した。ここからは轡を構成する主な属性の変化の方向性について確認する（図3）。

銜^{はな}は馬の口内の齒槽間縁にはませて、騎乗者の意図を馬に伝える轡の中でも最も重要な部品である。鍛鉄製銜の製作技法は多様であるが、朝鮮半島南部においては基本的に環部成形に鍛接技術を用いないものから用いるものへという変遷が確認される。朝鮮半島南部で最初に登場する技法は、鍛接技術を用いずに環状またはS字状の鉄棒を振って両側に環部を成形する多條（二條ないし三條）振り技法^③で、原三国時代から三国時代Ⅰ段階にかけて主流をなす。一本の鉄棒の両端に環部を成形する無振り技法b類と一條振り技法b類は、三国時代Ⅱ段階以降に出現し、以後主流となる技法である。これらの技法でつくられた銜には、環部成形に鍛接技術を用いるものも多くみられるが、その全てが環部を鍛接しているわ

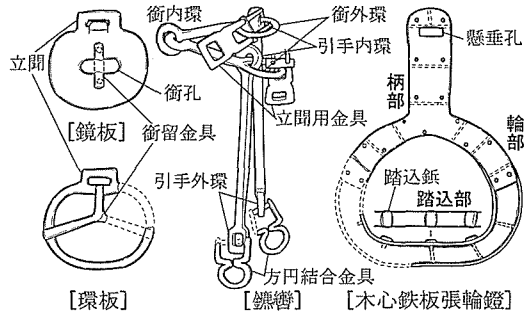


図2 轡と鐙の部分名称

稿で詳しく検討する。

引手 引手は銜に取り付け、手綱と連結するための部品である。銜に比して必ずしも必要な部品ではない。形態から二

條線引手、多條振り引手、一條線引手に大別される。二條線引手は中国東北地方では紀元前後には出現する。多條振り引手は原三国時代Ⅱ段階にも例外的に認められ、三国時代Ⅰ段階に盛行する。一條線引手は三国時代Ⅱ段階から確認される。

連結方法 銜と引手の連結方法である。直接連結するもの、遊環を介するもの、銜外環に固定式遊環（二重外環）を取り付けるものがある。遊環や固定式遊環は三国時代Ⅲ段階以降に出現する。

けではない。S字状に曲げた鉄棒を丁寧に鍛接した無振り技法a類は紀元前後の中国北方で広く流行した技法で、環部成形に鍛接技術を用いる点で、同時期の朝鮮半島南部で流行した多條振り技法と区別される。一條振り技法a類は類例が少なく位置付けが難しいが、原三国時代Ⅱ段階から認められる。多條振り技法と同じく環部成形に鍛接技術を用いない。

銜留 銜留は馬の口内から銜の脱落を防ぐことを目的とする鏡板や鑣などの総称である。頭絡との連結方式の違いから二孔式と立聞式に区分される。朝鮮半島南部においては、前者は原三国時代、後者は三国時代の轡の指標となる。二孔式は鑣のみであるのに対し、立聞式は鑣、鏡板、環板などさまざまである。鑣は構造から二孔式と立聞式に、材質から金属製と有機物製に大別される。鏡板轡や環板轡は銜留金具の違いからA類（横方向またはX字形銜留金具）とB類（縦方向銜留金具）、C類（無銜留金具）に大別される。A類は三国時代Ⅰ段階に出現し、B類は三国時代Ⅱ段階（環板轡）から三国時代Ⅲ段階（鏡板轡）にかけて出現する。C類の位置付けについては本

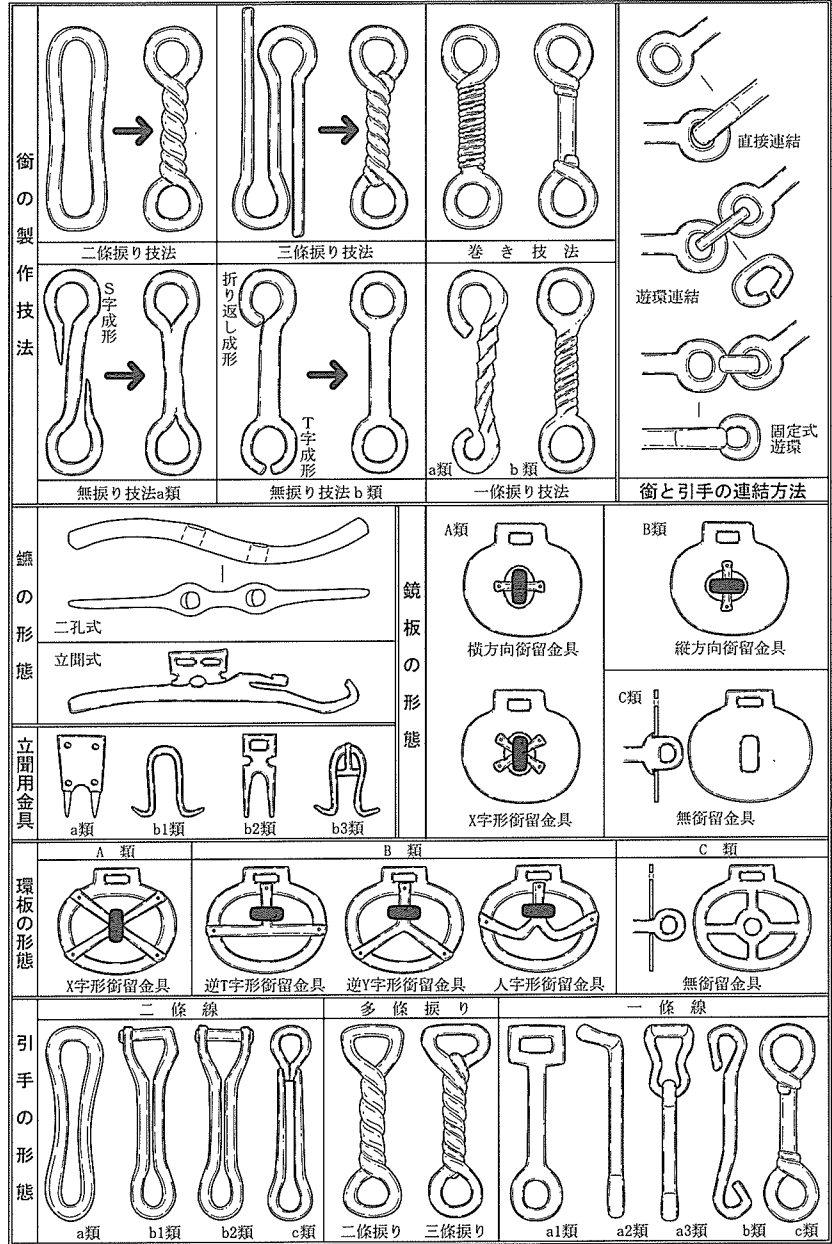


図3 轡の各属性

2 鐙の諸型式と変遷

鐙は馬に乗る際の足掛けとしてはじまったと考えられ、騎乗時における身体の安定を得るための装具である(図2右)。

騎乗に必ずしも必要ではないためか、轡に比べて出現がかなり遅れる。出現時期については様々な説があるが、「永寧二年(三〇二)」碑を出土した長沙金盆嶺二一号墓の騎人俑にみられる片鐙表現から、三世紀後半頃、騎乗の苦手な漢人によって発明されたという説が現在の一般的な見解である。^⑦ 世界最古の実物資料は中国東北地方から出土している。四・五世紀には木心を金属板で補強した木心金属板張輪鐙が東北アジア全域に普及した。

柳昌煥は小野山節や千賀久らによる日本の鐙研究の成果を土台に、朝鮮半島南部出土木心鉄板張輪鐙に対して詳細な属性分析をおこない、踏込部の側面幅(I式…柄部と幅が同じもの、II式…柄部に比べて幅広のもの)と、柄部の平面形態(A式…太く短いもの、B式…細く長いもの)、そして外装鉄板の形態と構造の組合せから諸型式を設定し、その変遷を明らかにした。^⑧ 白井克也は柳の成果をさらに発展させ、土器編年との対応関係からI A式→I B式→I B・II B式→II B式の順に変遷することを示し、さらには日本列島出土鐙との併行関係を設定した。^⑩

白井はI A式とI B式が共存しないことなどからI A式単純期からI B式単純期へ変遷するとしたが、早くからI A式とI B式を系譜差とした崔秉鉉をはじめ、両者の関係を連続的に把握することについては批判も存在する。^⑪ しかし、たとえ両者の系譜が異なるとしても、朝鮮半島南部においては相對編年上、I A式の出現が先行すること、そしてI A式とI B式の一部の細別型式間に型式学的連続性が認められることは否定できない。一方で両者の併行関係の有無については慎重に検討する必要がある。この他に、張允禎が滑止用の踏込鋲の有無を大別基準とするなど、形態よりも機能や製作技法を重視した分類をしており注目される。^⑫ これらをふまえ本稿では、柳の大別型式に踏込鋲の有無を加えてI A式(無鋲)というように表記する。なお、轡編年と鐙編年の対応関係については三国時代I段階がI A式鐙出現以前に、三国時代II

段階がⅠA式鐙、三国時代Ⅲ段階がⅠB式鐙出現以降におおむね対応する。^⑬ 壺鐙や鉄製輪鐙は、木心金属板張輪鐙よりは出現が遅れ、三国時代Ⅲ段階以降に出現する。

最後に轡と鐙の各種属性のうち、どの属性が広域編年の指標となりうるのかについて見通しを立てておきたい。先行研究においては形態や装飾の類似、文様の変化などを併行関係や前後関係の基準とすることが多かったが、研究者の主観に左右されやすく、広域編年の指標としては適切ではない。^⑭ そこで本稿では各地域における製作技術や機能の変化に注目する。まず轡については、鍛接技術の発達と密接に関連していると考えられる銜製作技法が、各地域の轡の併行関係を考える上で第一の指標となろう。この他に各地域で認められる鏡板轡A類も、各地域の併行関係を把握する鍵となる。また鑑轡における二孔式と立聞式という差も、鏡板轡出現以前の大きな前後関係として認められよう。鐙については形態よりも機能の発達と密接な関連を示すと考えられる踏込鉤の有無が、各地域の鐙の併行関係を把握する指標となる可能性が高い。以上のような見通しのもと、次章からは各地域の馬具を整理していく。

- ① 【諫早二〇五a・b】。
- ② 【金斗詰一九九三】。
- ③ 二條振り技法と三條振り技法は外見上の識別が難しく、実見してない資料の判断には慎重を要する。ただし、両技法は振ることによって環部を成形する点で製作原理が共通し、両技法の出現時期や地域にも有意な差は見出されない。そこで細分不可能なものを含めて少なくとも複数の鉄棒を振ると判断されるものを多條振り技法と総称する。
- ④ 【諫早二〇〇七】。朝鮮半島南部の忠州金陵洞七八一一号墓や清州鳳鳴洞C—三一号墓からも無振り技法a類の銜をもつ轡が出土しているが、あくまで例外的な存在に留まる。
- ⑤ 【金斗詰二〇〇〇】。日本における広義の「鏡板」と同義である。
- ⑥ 【諫早二〇〇七】。
- ⑦ 【樋口一九七二】。
- ⑧ 【小野山一九六六】、【千賀一九八八】など。
- ⑨ 【柳昌煥一九九五】。
- ⑩ 【白井二〇〇三】。
- ⑪ 【崔秉鉉一九八三・九二】、【李熙溶一九九五】。
- ⑫ 【張允禎二〇〇一】。
- ⑬ 【諫早二〇〇五a】。
- ⑭ 共存遺物などによる検証が可能な地域編年においてはその限りではない。

第二章 三燕地域出土馬具の製作年代

三燕地域出土馬具は遼寧省朝陽を中心とした大凌河流域の墓から出土している。また遠隔地ではあるが、前燕墓と考えられている河南省安陽孝民屯墓群出土馬具を合わせて検討をおこなう。

1 轡の製作技術

銜 三燕地域から出土した轡は一六点が確認されているが、銜の製作技法について検討できる資料は七点に過ぎない(表1)。全て鉄製二連式である。製作技法についてみていくと、北票喇嘛洞ⅡM一〇一号墓例(図4-5)は二條振り技法であることが確認されており、喇嘛洞ⅠM一〇号墓例は二條振り技法の可能性が指摘されている。喇嘛洞ⅡM一九六号墓例は写真から三條振り技法の可能性が高い。^③この他に北票北溝M八号墓の二点の轡(図4-6・7)と朝陽三合成墓例(図4-3)は図面の表現から多條振り技法で銜を製作したものと考えられる。朝陽王子墳山M九〇〇一号墓例(図4-9)は細かい條線で振りが表現されており、一條振り技法b類の可能性があるが、写真が掲載されておらず判断が難しい。この他にも馮素弗墓例の銜は鍛鉄製で繩を撚ったような痕跡をもつと報告され、北票倉糧窖墓例も花谷によれば鉄棒を撚った痕跡をとどめるとされるが、具体的な製作技法は不明である。

銜留 銜留について検討できる資料は一四点でいずれも立開式である。鏡板轡が最も多く一一点を数える。鏡板の材質は多様であるが、全てA類である。形態は基本的に楕円形で、三葉形もある。環板轡は北溝M八号墓からA類が一点のみ出土している。鑣轡は金属製鑣轡と有機物製鑣轡がそれぞれ出土している。倉糧窖墓からは立開孔を二つ備える青銅製の立開用金具が出土していて、花谷によれば脚部には鹿角とおぼしき有機質の痕跡が残っているようである。喇嘛洞ⅡM一〇一号墓例の銜外環に鏤着した棒状鉄製品は「S字形枝状鑣」と報告されているが、異論もある。^④

表1 三 燕 の 轡

地名	古 墳 名	銜	銜 留			引 手	遊環
			種類	型式	材質		
北票	喇嘛洞ⅡM101号墓	二條振り	?	?	?	—	—
北票	喇嘛洞ⅠM10号墓	二條振り?	鏡板	A類(円)	鉄	二條b1類	×
北票	喇嘛洞ⅡM196号墓	三條振り?	鏡板	A類(円)	鉄	—	—
北票	北溝M8号墓①	多條振り	鏡板	A類(円)	鉄	二條b2類?	×
	北溝M8号墓②	多條振り	環板	A類(X)	鉄	—	—
朝陽	三合成墓	多條振り	鏡板	A類(円)	鉄地金銅	—	—
朝陽	王子墳山M9001号墓	一條振り?	鏡板	A類(円)	鉄	二條a類	×
北票	倉糧窖墓	振り?	鑑	立開式	鹿角	—	—
北票	馮素弗墓	振り?	—	—	—	—	—
安陽	孝民屯154号墓	—	鏡板	A類(円)	金銅	二條c類	×
朝陽	袁台子壁画墓	—	鏡板	A類(円)	金銅	二條b2類	×
朝陽	十二台鄉磚廠88M1号墓	—	鏡板	A類(三)	金銅	二條b2類	×
北票	喇嘛洞ⅡM202号墓	—	鏡板	A類(三)	金銅	—	—
北票	喇嘛洞ⅡM16号墓	—	鏡板	A類(円)	鉄地金銅	二條b2類	×
北票	西溝村採集品	—	鏡板	A類(円)	鉄地金銅	—	—
北票	喇嘛洞1988年出土品	—	鑑	立開式	金銅	—	—

〔凡例〕

- ・無いものを×、不確実なものを？、検討不能なものを一で示した。
- ・銜 振り：振り技法(細分不能)。
- ・銜留 円：楕円形、三：三葉形、X：X字形銜留金具。
- ・引手は全て「線引手」を省略した。

引手 引手について検討できる資料は七点で、全て二條線引手である。

連結方法 連結方法を検討できる資料は七点で、どれも遊環を介さずに銜外環と引手内環を直接連結する。

小結 これまで確認されている轡に一点も二孔式が認められないことは、これらの製作年代が漢代にまで遡りえないことを示す。銜は不確定資料を除き、全て多條振り技法で、このほかにも横方向銜留、二條線引手の採用や、遊環を介さずに銜と引手を直接連結するといった多くの属性を共有する。もちろん銜留の種類、材質には多様性が認められるが、それらを超えた共通性を看取することができよう。また、これらの共通性は朝鮮半島南部三国時代Ⅰ段階と一致することから、厳密ではないものの三燕地域出土轡と三国時代Ⅰ段階の轡の製作年代が一部併行

する可能性を考慮することができる。

2 相対編年と製作年代

本節では、三燕地域出土馬具の相対編年を設定し、紀年墓出土馬具をもとにおおよその年代を付与する。

まず、被葬者が四一五年に没したことが明らかな馮素弗墓からは、轡と木心金銅板張輪鐙(図5-13)、そして馬甲と考えられる小札類が出土している。残念ながら鐙以外の詳しい情報は不明である。当該期における副葬年代が確かな唯一の馬具として、馮素弗墓の鐙は今なお重要な位置を占めているが、三燕地域の他の鐙は基本的にI B式(無銕)鐙であり、馮素弗墓のI A式(無銕)鐙は孤立した存在であることも事実である。^⑤ここではひとまず、馮素弗墓出土馬具が確実に北燕代と位置付けられる唯一の資料であること、同型式の鐙は三燕地域では未だ類例がないことを確認しておく。

次に副葬年代をある程度推測できる孝民屯一五四号墓と袁台子壁画墓について検討してみよう。孝民屯一五四号墓は、穴沢味光や田立坤によって前燕の慕容儼が冉魏の首都鄴城を陥落させた三五二年、ないし鄴城に遷都した三三七年以降につくられた前燕墓と考えられており、三七〇年の前燕滅亡を下限とすることに異論はない。^⑥また、袁台子壁画墓は報告者によって四世紀初から四世紀中葉の年代が与えられて以来、様々な年代観が出されてきたが、近年、田によって壁画に墨書された紀年の検討がなされ、三五四年の可能性が最も高く、三六六年の可能性も排除できないという。^⑦両墓からは鏡板轡A類(図4-1・2)のほかに、I B式(無銕)鐙(図5-8)、硬式鞍、圭形杏葉(図5-4)、鈴金具(図5-1・2)などの各種馬具が出土しており、三燕地域にはこれらと共通した組合せをもつ馬具出土古墳が数多く存在する(表2)。両墓からは出土していないものの、步搖付逆半球形飾金具(図5-7)もその組合せに加えられる。^⑧両墓を通じて、これらの各種裝飾馬具が少なくとも三五〇年代には製作されていたと考えることができる。これらは鐙型式やその組合せから馮素弗墓出土馬具とは明確に区分され、北燕代以前の典型的な裝飾馬具セットと評価できよう。

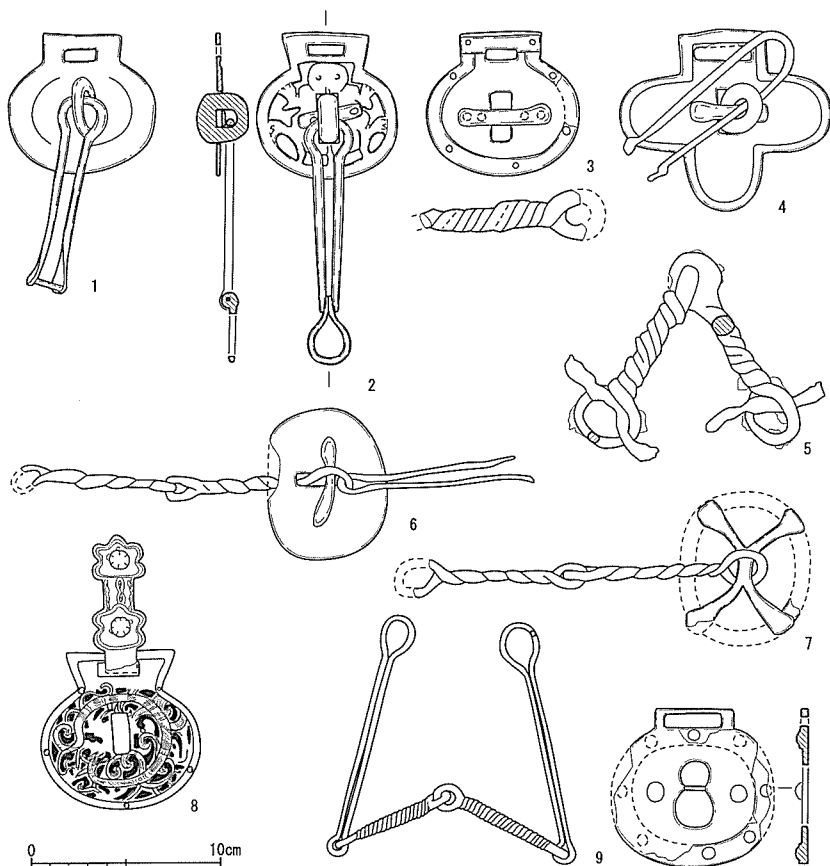


図4 三燕の轡（S=1/4, 6・7除く）

1：袁台子壁画墓 2：孝民屯154号墓 3：三合成墓 4：十二台鄉磚廠88M1号墓 5：喇嘛洞ⅡM101号墓 6：北溝M8号墓① 7：北溝M8号墓② 8：西溝村採集品 9：王子墳山M9001号墓

ところで、様々な墓から出土するこれらの各種馬具の間には、一定の規格性が認められる。特に圭形杏葉は全長や外形線が近似し、製作時における型の存在が想定される^⑩。朝陽から八〇〇km近く離れた孝民屯一五四号墓例さえも外形線がほぼ一致することは単なる偶然とは考えがたい。また、歩搖付飾金具も逆半球形台座に筒金を備え、心葉形歩搖を一枚取り付けるとい

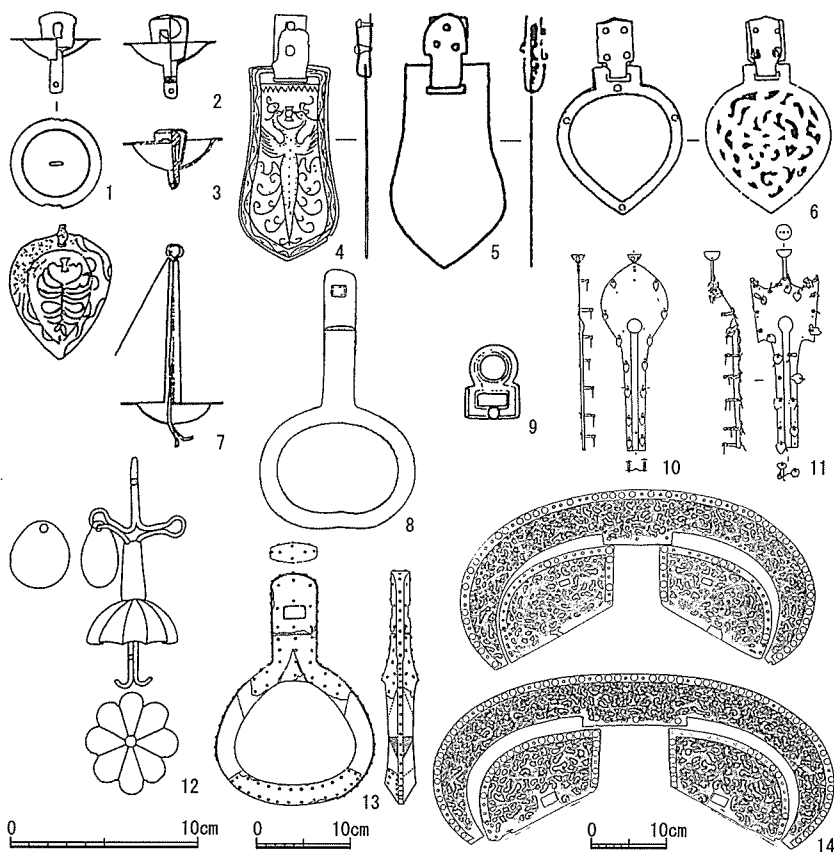


図5 三燕の各種馬具 (1~7・9・12:S=1/4、8・10・11・13:S=1/8、14:S=1/10)

1・4・8・10：孝民屯154号墓 2・9：袁台子壁画墓 3・5・6・7・11：十二台鄉磚廠88M1号墓 12：喇嘛洞1988年出土品 13：馮素弗墓 14：喇嘛洞ⅡM101号墓

形態的共通性をもつ。一方で、杏葉や步搖は文様の有無によつて区別される。鐙もI・B式(無銑)鐙という点で、基本形状は共通するが、材質は非常に多様である。すなわち、杏葉や步搖付飾金具、鐙は、轡と同じく、一定の規格性をもちながらも、材質や文様に差異が認められるのである。このような傾向は硬式鞍をみると一層明瞭である。内山敏行の分類案^⑩を参考に鞍橋の各属性について整理してみると、各部分の形状や材

表2 三燕の馬装具

古墳名	銜留			銜	鐙	鞍橋	杏葉	鈴金具	飾金具
	種類	形態	材質						
孝民屯154号墓	鏡板	楕円形	金銅	—	金銅(無)	Ⅲ式	圭	○	×
袁台子壁画墓	鏡板	楕円形	金銅	—	木革(無)	Ⅲ式	圭	○	×
十二台郷磚廠 88M1号墓	鏡板	三葉形	金銅	—	金銅(無)	Ⅱ・Ⅲ 式	圭・心	○	○
喇嘛洞ⅡM202号墓	鏡板	三葉形	金銅	—	×	Ⅲ式	圭	×	○
三合成墓	鏡板	楕円形	鉄金	多條	木金(無)	?	圭	×	○
西溝村採集品	鏡板	楕円形	鉄金	—	×	Ⅱ式	圭	○	×
北溝M8号墓①	鏡板	楕円形	鉄	多條	木金(無)	Ⅲ式	圭	×	○
北溝M8号墓②	環板	X字形	鉄	多條	木金(無)	Ⅲ式	圭	×	○
喇嘛洞ⅡM266号墓	×	×	×	×	木金(無)	Ⅰ式	×	×	○

〔凡例〕

- ・○×は有無を示し、—は検討不能、?は不確実なことを示す。
- ・銜留 鉄金：鉄地金銅張。
- ・銜 多條：多條振り技法。
- ・鐙(全てⅠB式) 金銅：金銅製輪鐙、木革：木心革張輪鐙、木金：木心金銅張輪鐙。
- ・鞍橋の各型式は表3参照。
- ・杏葉 圭：圭形杏葉、心：心葉形杏葉。
- ・飾金具は全て逆半球形飾金具。

質、透彫の有無などに多様な差異を内包しながらも、各型式がそれぞれ属性の一部を共有していることがよくわかる(表3網掛け部分)。以上を総合すると、これらの裝飾馬具セットは比較的近接した時間の中で、かつ一定の規範のもとに製作された一つの馬具様式として把握可能であり、桃崎の想定するように宮廷付属工房のような場所で作られた可能性が高い^⑩。すなわち、形態や材質に認められる差異は、基本的に時期差よりは階層性などを反映しているものと考えられる。

それではこれら裝飾馬具セットの上限年代はいつ頃に求められるのであろうか。薰高は北溝M8号墓出土馬具について透彫などが認められないことから古式と判断し、前燕建国以前に位置付けた^⑪。しかし馬具以外の情報がないで、透彫の有無を新古の基準とできるのか検証が困難である。同じく前燕建国以前に遡るとされる喇嘛洞墓群は、四〇〇基以上が調査されたにも関わらず、一部の断片的な紹介に留まり、全貌がつかみがたい。北溝M8号墓や喇嘛洞ⅡM二〇二・ⅡM二六六号墓からは、圭形杏葉や歩搖付逆半球形飾金具が出土しており、孝民屯一五

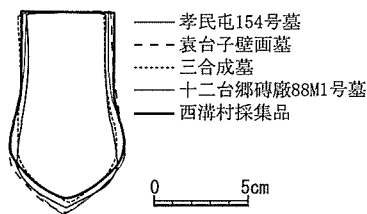


図6 圭形杏葉の規格性 (S=1/4)

四号墓と近接した時期が想定される。また、喇嘛洞村一九八八年出土の菊形台座の步搖付飾金具(図5-12)は三燕地域からはほとんど出土せず、次章で検討する高句麗地域からの移入品、ないしはその影響を強く受けた可能性が高い。本例のような筒金を備える菊形飾金具は、高句麗地域では四世紀後葉以降に出現することから、桃崎が指摘するように喇嘛洞墓群の中には前燕滅亡後に造営された墓も含まれているのであろう。^⑭ 喇嘛洞墓群自体の造営開始が前燕建国以前に遡ることは否定しないが、現在まで公開された喇嘛洞墓群出土馬具の中に孝民屯一五四号墓例や袁台子壁画墓例よりも明らかに先行する型式と考えられるものはない。

ここで視点を変えて馬具が出土していない墓に注目してみよう。墓誌から被葬者が三二四年に死亡したことがわかる錦州李鹿墓からは、馬具が一点も出土しなかった。この時期の中原では馬具の副葬は基本的に認められず、墓誌を漢人の風習と考えれば、李鹿墓から馬具が出土しなかったのはある意味当然かもしれない。しかし、李鹿墓からは鮮卑土器の流れを汲む暗文が施文された長頸壺が出土するなど、在地の要素も認められる。また、華麗な歩搖冠を副葬し、前燕建国以前の鮮卑慕容部の代表的な遺物である北票房身墓群や朝陽田草溝晋墓などでも馬具は出土していないことから、そもそも鮮卑慕容部に裝飾馬具セットを副葬する習慣があったのが問題となる。確実な資料から議論を展開させるなら、鏡板轡をはじめとする裝飾馬具の成立年代は、李鹿墓と、孝民屯一五四号墓や袁台子壁画墓の間に求められよう。よって上限年代については、ひとまず四世紀中葉(第2四半期)と考えることとし、今後の資料増加に期待したい。

次にこれらの裝飾馬具セットの下限はいつ頃に設定できるであろうか。桃崎は三燕馬具の下限について、四三六年の北燕滅亡頃と把握し、日韓の資料との比較から三燕馬具の一部を五世紀代以降に位置付ける。^⑮ 例えば喇嘛洞ⅡM一〇一号墓

表3 三燕の鞍橋

古墳名	型式	外形	洲浜	磯金具	材質	装飾
喇嘛洞ⅡM101号墓 喇嘛洞1993年出土品 喇嘛洞ⅡM266号墓	I式 	丸形	有凸形	有	金銅 金銅 鉄金	透彫 透彫 透彫
十二台郷磚廠88M1号墓① 西溝村採集品 喇嘛洞1988年出土品	Ⅱ式 	角形	有凸形	有	金銅 金銅 金銅	透彫 透彫 透彫
十二台郷磚廠88M1号墓② 孝民屯154号墓 北溝M8号墓 喇嘛洞ⅡM202号墓	Ⅲ式 	角形	無凸形	無	金銅 金銅 金銅 鉄	素文 素文 素文 素文

* I式—喇嘛洞 1993年出土品。Ⅱ式・Ⅲ式—十二台郷磚廠88M1号墓。

【凡例】

・外形、洲浜は内山分類【内山二〇〇五】。

・材質 鉄金：鉄地金貼。

の金銅製透彫鞍（図5-14）について、大阪府伝管田丸山古墳出土金銅製透彫鞍（二号鞍）との類似や、ⅡM一〇一号墓出土帯金具に対する藤井康隆の年代観^⑮などを根拠に五世紀代とする。しかし内山が指摘したように、三燕の鞍と伝管田丸山古墳二号鞍は同系統であっても、同時期とみることはできない^⑯。また桃崎が参考にする藤井の年代観自体が、桃崎の馬具の年代観を参考にしてゐる点も問題である^⑰。そもそも桃崎自身が考えるように各種装飾馬具が宮廷付属工房でつくられたのであれば、前燕が滅亡した三七〇年から慕容垂が後燕を建国した三八四年の間の前秦による支配期間に、そのような装飾馬具が何の変化もなく製作し続けられたであろうか。後燕唯一の紀年墓である朝陽崔通墓（三九五年没）からは馬具が出土していない。また崔通墓をはじめ後燕代以降に比定される墓からは基本的に鮮卑土器系統の長頸壺は出土しておらず、副葬土器においても断絶が認められる。土器との共存関係が明らかな馬具出土墓の中で、土器編年上、崔通墓以降に位置付けられるのは馮素弗墓のみであること、馮素弗墓の鐙がそれ以前の鐙と型式学的に断絶することから、前燕代に成立した装飾馬具セットが北燕代はもちろん、後燕代にさえそのまま製作された可能性は低い^⑱。菊形や半球形台座の歩搖付飾金具、ⅠA式（無銕）鐙といった前燕代に成立した装飾馬具セットを構成しない資料から前燕滅亡後の様相に迫りうるであろうが、それらには今のところ明確なセット関係が認められない。つまり、

前燕代は騎乗用馬具一式を副葬するのに対し、後・北燕代になると非副葬、ないし一部のみの副葬へと副葬品としての馬具の役割も変化した可能性が高い。

以上から三燕地域出土馬具は、多條振り技法銜の轡、I B式（無銕）鐙、IⅢ式の鞍橋、圭形杏葉、鈴金具や步搖付逆半球形飾金具などの裝飾馬具セットが製作される三燕Ⅰ段階と、菊形台座や半球形台座の步搖付飾金具や、I A式（無銕）鐙など以前とは型式を異にする馬具が製作される三燕Ⅱ段階^②に分けられる。三燕Ⅰ段階は四世紀中葉（第2・3四半期）、すなわち前燕代に、三燕Ⅱ段階は四世紀後葉～五世紀前葉にかけて、すなわち後・北燕代におおむね比定できる。

① 【中條二〇七】。

② 【花谷二〇六】。

③ 【遼寧省文物考古研究所二〇二一、図版九七】。

④ 花谷はX字形銜留鏡板轡、中條は有機物製銕轡の立間用金具とするなど認識に差異があるが、実見していないため見解を保留する。

⑤ I B式鐙がI A式鐙よりも先行する点が、朝鮮半島南部の様相と異なる。つまり柄部形態は、現状では広域編年の指標とはなりえない。

形態よりも機能重視する本稿の立場においては、三燕地域出土鐙に踏込銕をもつ資料や踏込部の幅が広い資料が認められないことこそ重要である。

⑥ 【穴沢一九九〇】、【田立坤一九九一】。

⑦ 【田立坤二〇〇二】。

⑧ ただし、どちらも木心金属板張輪鐙ではなく、孝民屯一五四号墓からは金銅製輪鐙が、袁台子壁画墓からは木心漆塗革張輪鐙が出土している。

⑨ 十二台鄉磚廠八八M一号墓からは鈴金具と、步搖付逆半球形飾金具が相伴しており、どちらも三繫の革帯の裝飾や結束に用いられたと考えられる。両者の相伴例はほかになく、同墓から鞍が二セット出土し

ていることから、同じ馬装に用いられたとは考えにくく、別々の馬装を構成するものと推測される。

⑩ 田中由理は日本の古墳から出土するf字形鏡板の外形線を比較検討し、一部の型式について製作時における型の存在を想定した【田中二〇〇四】。

⑪ 【内山二〇〇五】。

⑫ 【桃崎二〇〇四、五九一六一頁】。

⑬ 【蕙高一九九五】。

⑭ 【桃崎二〇〇四】。

⑮ 【桃崎二〇〇四】。

⑯ 【藤井二〇〇三】。

⑰ 三燕の外形丸形の鞍は全て海金具中央下の洲浜に相当する部分が下へ張り出す「有凸形」であるが、伝蒼田丸山古墳二号鞍は「無凸形」である【内山二〇〇五】。

⑱ 藤井はII M一〇一号墓の帯金具について、鞍の年代を参考に四期（五世紀前葉）に位置付け、「晋式帯金具が復活的に出現する」とした【藤井二〇〇三、九六〇頁】。これに対し町田章や小池信彦は、文様構成や銕留技法から、西晋代の帯金具を忠実に模倣したとみる【町

田二〇〇六】、【小池二〇〇六】。これらの見解が妥当であるのならば、ⅡM一〇一号墓の帯金具は藤井の二期（四世紀中葉―後葉）に位置付けられ、「復活的出現」という苦しい理解も必要なくなる。

⑮ 【姜賢淑二〇〇六】。

⑯ 前秦による支配期間も鮮卑慕容部系集団がこの地域で一定の力を維持していたとする意見を考慮すれば【小林一九八八】、前燕滅亡後に

もこれらの裝飾馬具が製作された可能性や、後燕代以降に復古的に前燕代のような馬具が製作された可能性を全く排除することはできない。⑰ 三燕Ⅱ段階として一括した各種馬具には明確なセット関係が認められず、同時期かどうかの判断が難しいが、三燕Ⅰ段階よりも後に製作されたという意味で便宜上、段階として把握する。

第三章 高句麗地域出土馬具の製作年代

高句麗地域出土馬具は吉林省集安・桓仁を中心に分布し、平安南道平壤付近や京畿道の漢江流域からも出土が認められる。墓以外に山城から出土した資料が一定数認められることが特徴である。本溪小市晋墓に関しては三燕墓とみる見解も存在するが、本稿では高句麗墓とみる見解に従い検討をおこなう。^①

1 轡の製作技術

銜 高句麗地域から出土した轡は二二点確認され、銜製作技法について検討できる資料は二一点である（表4）。全て鉄製二連式であったと考えられる。製作技法についてみていくと、集安禹山下三三二四一一号墓例は写真から二條振り技法である可能性が高い。^② 集安臨江塚例（図7-13）^③と桓仁高力墓子村一九号墓例^④は写真から三條振り技法であることが確認できる。また集安禹山下三三二八三号墓例と集安西大塚例（図7-12）、本溪小市晋墓例（図7-14）も少なくとも多條振り技法であることが確認できる。禹山下三五六〇号墓の二点の轡は、図面の表現から一條振り技法の可能性もあるが、写真が掲載されておらず判断が難しい。集安万宝汀二四二一一号墓（図7-11）や慈城西海里二一一号墓（図9-8）の鑣轡は、無振り技法a類と考えられる。無振り技法b類は鏡板轡を中心に様々な轡に用いられている。桓仁五女山城JC区か

表4 高句麗の轡

地名	古墳名	銜	銜留			引手	遊環
			種類	型式	材質		
本溪	本溪小市晋墓	多條振り	鏡板(円)	A類	鉄地金銅	二條?	×
桓仁	高力墓子村19号墓	三條振り	鑑?	—	—	二條b1類	×
桓仁	五女山城JC区①	無振りb	鏡板(心)	C類	鉄	二條a類	×
	五女山城JC区②	無振りb	環板(心)	C類	鉄	二條a類	×
集安	万宝汀242-1号墓	無振りa	鑑	立開式	鉄	二條b類	×
集安	臨江塚	三條振り	鑑?	—	—	—	—
集安	禹山下3241-1号墓	二條振り	鑑?	—	—	二條b類	×
集安	禹山下3283号墓	多條振り	鑑?	—	—	二條b類	×
集安	西大塚	多條振り	鑑?	—	—	—	—
集安	禹山下3560号墓①	一條振り?	—	—	—	二條b類	×
	禹山下3560号墓②	一條振り?	—	—	—	—	—
集安	七星山96号墓	無振りb	鏡板(円)	A類	金銅	二條b2類	×
集安	伝広開土王碑付近①	無振りb	環板(X)	B類	鉄	二條a類	×
	伝広開土王碑付近②	無振りb	—	C類?	—	二條a類	×
集安	万宝汀78号墓①	無振りb?	鏡板(円)	A類	金銅	二條	×
	万宝汀78号墓②	—	鏡板(円)	A類	金銅	—	—
慈城	ハクビ積石塚北柩	多條振り?	鑑	二孔式	金属	二條b1類	×
慈城	西海里2-1号墓	無振りa	鑑	立開式	有機物	二條b1類	×
平城	地境洞1号墓	無振りb	鏡板(心)	A類	鉄地金銅	二條	×
ソウル	紅蓮峰第2堡壘	部分巻き	—	—	—	一條c類	×
九里	峨嵋山第4堡壘①	無振りb	環板(心)	C類	鉄	一條c類	×
	峨嵋山第4堡壘②	部分巻き	鑑	立開式	有機物	一條c類	×

[凡例]

- ・無いものを×、不確定なものを?、検討不能なものを—で示した。
- ・銜留 円：楕円形、心：心葉形、X：X字形銜留金具。
- ・引手は全て「線引手」を省略した。

ら出土した二点の轡(図8-2・3)は無振り技法b類に該当するが、銜外環と銜身の境界に一对の突起をつくる。同じく伝広開土王碑付近出土品②例も銜外環と銜身の境界に段差を設けている。このような特徴は、ほぼ同時に出現する鏡板・環板C類の構造と関係すると考えられる。^⑤

銜留 銜留について細かく検討できる資料は一三点である。慈城ハクビ積石塚北

柳例（図9-1）のみ二孔式で、残りは全て立聞式に該当する。立聞式のうち鏡板轡が最も多く、六点を数える。これまでに出土した鏡板轡は三燕同様、基本的にA類である。五女山城J区C①例のみC類に該当するが、A類と同じく立聞を上に向けた際に銜外環が縦向きになるよう縦長方形の銜孔が穿けられている。鏡板の形態は楕円形が一般的で、平城地境洞1号墓例のような心葉形もある。材質は金銅製、鉄地金銅張、鉄製が確認される。環板轡は三点確認される。伝広開土王碑付近出土品①例（図7-6）はX字形銜留金具でありながら、銜外環が横方向に取り付けられる珍しい資料である。⑥。五女山城J区C②例、九里峨嵋山第四堡壘①例（図8-1）はC類で、心葉形を呈する。立聞式轡は金属製轡と有機物製轡が認められる。万宝汀二四二一号墓例は鉄製裝飾プロペラ形轡である。西海里二一号墓例や峨嵋山第四堡壘②例はb1類の立聞用金具が共伴しており、有機物製轡と考えられる。ほかにも臨江塚、西大塚、禹山下三三四一一号墓、禹山下三二八三号墓、高力墓子村一九号墓例は銜外環が銜内環に比して大きい形態的特徴から、轡の可能性がある。⑧。

引手 引手について検討できる資料は一八点で、全て二條線引手である。⑨。

連結方法 連結方法について検討できる資料は一八点で、全て遊環は用いずに銜外環と引手内環を直接連結している。

小結 高句麗地域の轡には立聞式以外に二孔式が認められる。二孔式であるハクピ積石塚例は原三国時代のものと考えるのが妥当であろう。また三燕地域の銜製作技法がほぼ全て多條振り技法であったのに対して、高句麗地域の銜製作技法は多様である。特に無振り技法も類は三燕地域には認められず、朝鮮半島南部においても三国時代Ⅱ段階以降に普及する比較的新しい技法である。すなわち、銜の製作技法が朝鮮半島南部と同じように変遷したのであれば、高句麗地域の轡は三燕地域の轡に比べ長期間に渡って製作された可能性が高い。これは高句麗が文献上存続した期間（紀元前三七―紀元後六六八）の長さを考えればある意味当然といえる。一方、横方向銜留、二條線引手の採用や、銜と引手を直接連結するといった朝鮮半島南部三国時代Ⅰ段階と共通する特徴が一貫して認められる点は、朝鮮半島南部の轡と大きく異なる点といえる。

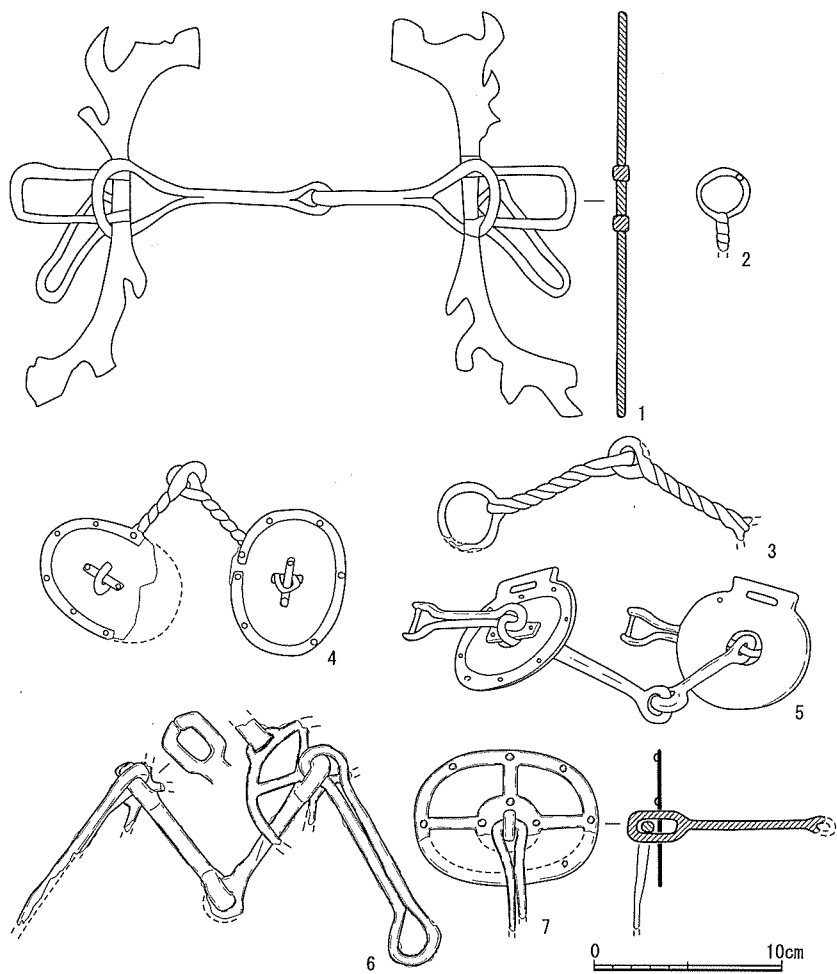


図7 高句麗の轡(1) (S=1/4, 5を除く)

- 1: 万宝汀242-1号墓 2: 西大塚 3: 臨江塚 4: 本溪小市晋墓 5: 七星山96号墓
6: 伝広開土王碑付近出土品① 7: 万宝汀78号墓①

2 相對編年の設定

三燕地域同様、高句麗地域にも紀年墓がいくつか存在するが、馬具が出土したのは「永和九（三三三）年」銘磚を玄室構築材に用いた修利墓のみである。しかし盗掘によって環状雲珠と鉸具や鞍金具と考えられる鉄片などが出土しただけで（図9・10・11）、相對編年の中での位置付けが難しい。馬具出土大型積石塚の中には王陵候補が含まれ、被葬者の没年代に迫りうるが、長年の被葬者論争が示すように年代観が安定しない。豊富な馬具類が出土した太王陵の被葬者については、正式報告によって改めて広開土王（在位三九一―四二二）説が提示された二〇〇四年以降に限っても、故国原王（在位三一―三七二）説^⑩、小獸林王（在位三七二―三八四）説^⑪、故国壤王（在位三八四―三九一）説と様々な被葬者が主張されている。そこでまず各種馬具の変遷を明らかにした上で、現状における相對編年を設定する。

高句麗地域出土馬具の中で、最も普遍的に出土し、その時間的変遷を把握できるものに歩搖付飾金具がある。太王陵以前の歩搖付飾金具について李熙濬は、大型積石塚に用いられた紀年銘瓦当との相伴關係を整理し、その変遷を明らかにした^⑫。それによると、「己丑（三三九）年銘瓦当が出土した西大塚（図9・7）から、「戊戌（三三八）年銘瓦当が出土した禹山下九九二号墓、「丁巳（三五七）年銘瓦当が出土した禹山下三三一九号墓へと時期が下るにつれて、歩搖付飾金具も心棒が次第に長大化する傾向があるとのことである。ただし、この頃までの変化は漸進的なものであったが、千秋塚（図9・19）で心棒を筒金で補強したものが現れ、太王陵（図9・20）では吊手部の改良がおこなわれ、それまでずっと一枚であった歩搖数を四枚に増やすというその後に引き継がれる大きな変化が起きる。筒金出現以前の歩搖付飾金具は菊形台座のみであったが、筒金出現以後（表5網掛け部分）になると半球形台座が現れる。このような歩搖付飾金具の変遷観は紀年銘瓦当との相伴關係や正式報告による墓の相對編年案と整合的である。

鎧と相伴する歩搖付飾金具は、全て筒金を備えることから、筒金を備える初期の歩搖付飾金具と相伴する太王陵のIB

表5 高句麗の步搖付飾金具

古墳名	台座	步 搖		筒金
		形 態	枚 数	
西大塚	菊	—	1	×
禹山下992号墓	菊	円	1	×
禹山下3319号墓	菊	円	1	×
西海里2-1号墓	菊	円	1	×
麻線溝2100号墓	菊	円	1	×
禹山下3142号墓	菊	—	1	×
禹山下3231号墓	菊	—	1	×
禹山下3283号墓	菊	—	1	×
禹山下3560号墓	菊	—	1	×
千秋塚	菊	円	1	○
太王陵	菊	円・心葉	1・4	○
本溪小市晋墓	半球	心葉	1・3	○
麻線溝1号墓	半球	心葉	1	○
禹山下41号墓	半球	円	1	○
長川2号墓	半球	円	1	○
禹山下2891号墓	半球	—	1	○
禹山下3105号墓	半球	円	1	○
万宝汀78号墓	半球	円	1・3・4	○

[凡例]

同一墓出土品の中に歩搖形態や取付け枚数が複数確認されるものについては、・を付け併記している。

表6 高句麗の鐙

古 墳 名	種 類
太王陵	木心金銅板張輪鐙(無銕)
七星山96号墓	木心金銅板張輪鐙(無銕)
禹山下41号墓	木心鉄板張輪鐙(?)
五女山城F20区	木心鉄板張輪鐙(?)
万宝汀78号墓	木心金銅板張輪鐙(有銕)
地境洞1号墓	木心鉄板張輪鐙(有銕)
五女山城F42区	木心鉄板装壺鐙(無銕)
五女山城JC区	木心鉄板装壺鐙(無銕)
五女山城採集品	木心鉄板装壺鐙(無銕)
国内城	鉄製輪鐙(無銕)
高爾山城	鉄製輪鐙(無銕)
峨嵯山第4堡壘	鉄製輪鐙(無銕)

式木心金銅板張輪鐙(図9-15)を高句麗地域における最古の鐙の一つと考えることができる。高句麗地域の鐙の変遷が朝鮮半島南部と同じであったならば、太王陵例のような踏込銕を備えない木心金属板張輪鐙から、踏込銕を備える木心金属板張輪鐙を経て、鉄製輪鐙や壺鐙へという変遷が想定される(表6)。なお、IA式鐙は今のところ確認されていない。これに対し姜仁旭は、五女山城JC区などから出土した鐙(図9-27)を「鉄製輪鐙」とし、報告書の年代に従って四世紀末～五世紀初には世界最古の「鉄製輪鐙」が高句麗で出現したとする。姜の見解に従えば太王陵の年代が多少前後したとしても、木心金属板張輪鐙と出現時期にそれほど差がなかったことになる。しかし、そもそも五女山城の「鉄製輪鐙」は全て構造上、「杓子形木心鉄板装壺鐙」^⑩に該当すると考えられる。また四世紀末～五世紀初という報告書の年代比定にもそのまま従うことはできない。この壺鐙の年代を考える上で、相伴する轡の構造が参考になる。JC区(鉄器窖

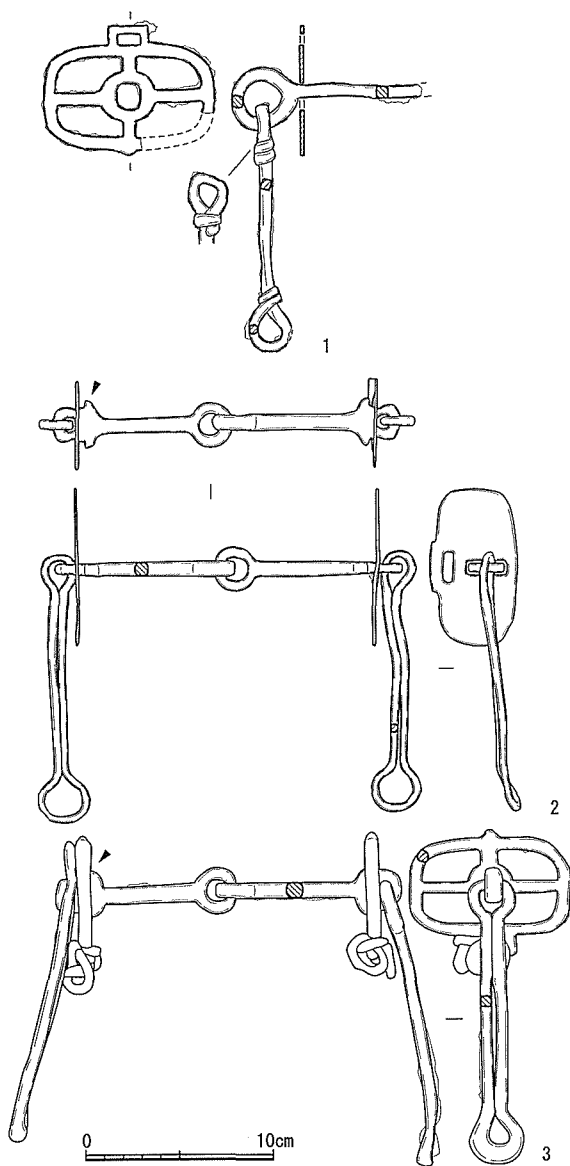


図8 高句麗の轡(2) (S=1/4)

1: 峨嵋山第4堡壘① 2: 五女山城JC区① 3: 五女山城JC区②

蔵)からはC類の鏡板轡、環板轡が一点ずつ出土しているが、これらの類例として漢江流域の峨嵋山第四堡壘から出土した環板轡を挙げることができる(図8)。三者の銜外環の製作技法に注目すると、単純な折り返し成形によって環部を成形する峨嵋山例は、環板を銜外環側に固定するのが難しいのに対し、JC区の二例は銜外環付近の一对の突起によって、鏡板や環板が銜身側へ移動するのを防いで、馬に装着しやすくなっており、峨嵋山例より発達した型式といえることができる。漢江下流域に位置する峨嵋山例の製作年代は、高句麗がこの一帯を支配した四七五年頃から五五一年頃の間に収まると考えられるため、これより型式学的に新しいJC区出土の二例も六世紀代以降に製作されたと考えるのが妥当であろう。¹⁰⁾

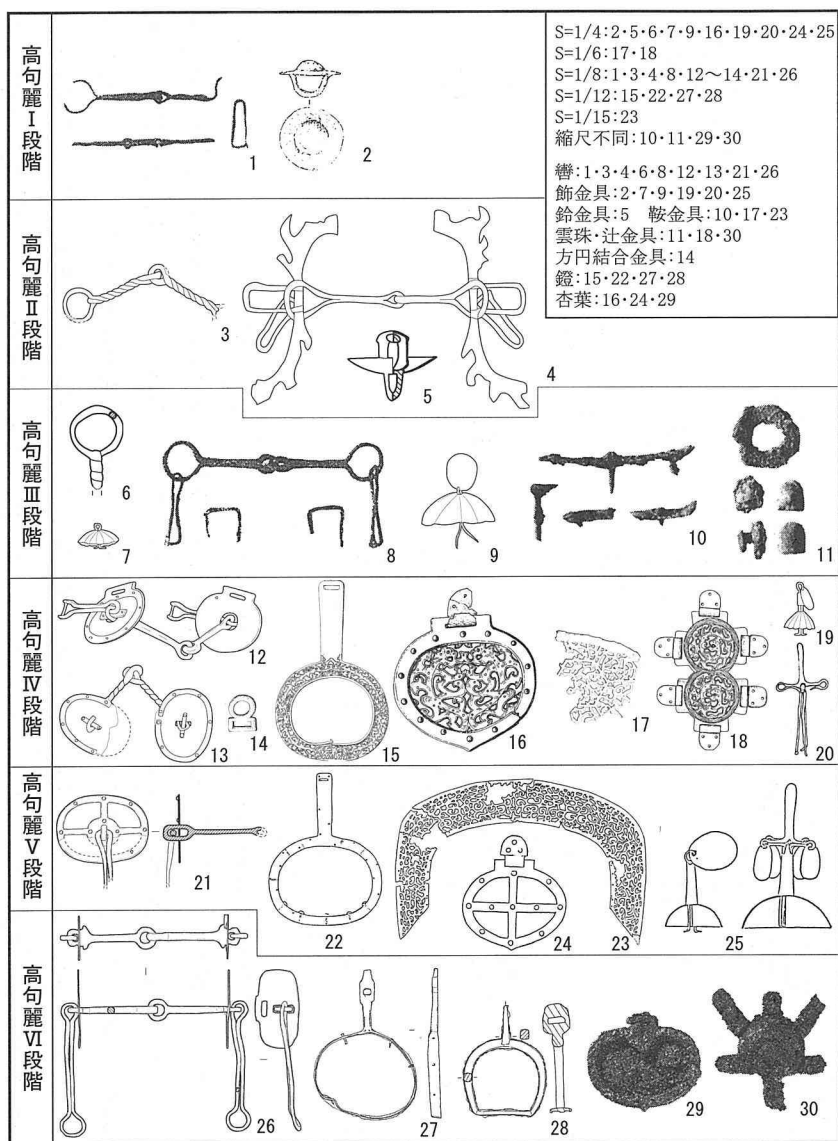


図9 高句麗馬具の編年

1・2:ハクビ積石塚 3:臨江塚 4・5:万宝汀242-1 6・7:西大塚 8・9:西海里
 2-1 10・11:冷利墓 12:七星山96 13:本溪小市晋墓 14~18・20:太王陵 19:千秋塚
 21~25:万宝汀78 26・27:五女山城JC区 28:峨嵋山第4堡壘 29・30:水落山堡壘

以上の検討をふまえた上で、各種馬具の共伴関係から、高句麗地域出土馬具を六段階に編年する（図9）。

高句麗Ⅰ段階は二孔式鏤轡の出現を指標とする。現時点でこの段階に位置付けられる資料は、多條振り技法の銜をもつ二孔式金属製鏤轡のハクビ積石塚例のみである。

高句麗Ⅱ段階は立開式鏤轡の出現を指標とする。步搖付菊形飾金具はまだ出現していない。多條振り技法と無振り技法a類が併存することが特徴で、無振り技法a類の銜をもつ装飾プロペラ形鏤轡の万宝汀二四二—一号墓例と多條振り技法の銜をもつ鏤轡の臨江塚例や禹山下三三四—一号墓例、高力墓子村一九号墓例などがこの段階に位置付けられる。

高句麗Ⅲ段階は筒金をもたない步搖付菊形飾金具の出現を指標とする。鏡板轡や環板轡、鐙はまだ出現していない。無振り技法a類の銜をもつ有機物製鏤轡の西海里例や、多條振り技法の鏤轡の西大塚例、禹山下三三八三号墓例などがこの段階に位置付けられる。前段階から引き続き多條振り技法と無振り技法a類が併存する。なお、禹山下三五六〇号墓では一條振り技法の可能性のある二点の轡が、筒金をもたない步搖付菊形飾金具と共伴している。これが一條振り技法であるならば、高句麗地域における唯一の資料となるが、実見していないため判断を保留する。

高句麗Ⅳ段階は筒金を備える步搖付菊形飾金具の出現を指標とする。大型積石塚では千秋塚例が初現と考えられる。千秋塚に続く太王陵からは、吊手部をもつ步搖付菊形飾金具やIB式（無鉈）鐙、心葉形杏葉などその後の高句麗馬具を特徴付ける裝飾馬具が出土している。Ⅳ段階以前は大型積石塚出土馬具ですら鏤轡と步搖付菊形飾金具などからなる比較的簡素な組合せであったことと比べれば、この段階に高句麗地域出土馬具が質量ともに大きく飛躍するといえよう。本溪小市晋墓例と七星山九六号墓例もこの段階に位置付けられる。両墓からは鏡板轡A類が出土しているが、前者は多條振り技法、後者は無振り技法b類と銜の製作技法が異なる。いずれにせよこの段階になると、確実に無振り技法b類が出現する。なお、高句麗地域の轡が朝鮮半島南部と同じように変化していったのであれば、多條振り技法の鏡板轡や環板轡が、無振り技法b類の鏡板轡や環板轡の出現に先行して、高句麗Ⅲ段階からⅣ段階にかけてのどこかで出現した可能性が高い。資

料が不足しており現状では認識できないものの、将来資料の増加によって細分される可能性を残しておく。

高句麗Ⅴ段階はⅠB式（有鉦）鉦を指標とする。万宝汀七八号墓例や地境洞一号墓例などがこの段階に位置付けられる。基本的に前段階に完成した鏡板轡A類をはじめとする各種裝飾馬具の製作を継続する。

高句麗Ⅵ段階は鏡板轡C類、環板轡C類を指標とする。現在出土している鉄製輪鉦や壺鉦は基本的にこの段階以降のものである。これ以降、古墳出土資料が減少し、山城出土資料に著しく偏っていく。五女山城J区、峨嵯山、紅蓮峰などの山城出土馬具がこの段階に位置付けられる。また、伝広開土王碑付近出土品②例も銜外環付近の段差から五女山城J区^①の二例に近い時期が想定できる。この他にも轡や鉦は出土していないが、漢江下流域に位置するソウル水落山堡壘出土馬具（図9-29・30）もこの段階に位置付けられる。なお、Ⅴ段階とⅥ段階は上限年代には確実に差異があるものの、前者は古墳から、後者は山城からという出土遺構の性格の違いを考慮すれば、一定の併行期間を想定する必要がある。

3 製作年代の検討

紀年銘瓦当に対する解釈や王陵比定問題が未解決な高句麗地域には、三燕地域に比べて良好な年代決定資料が存在しない。そこでまず、年代が明らかとなった三燕地域との併行関係について検討してみよう。

三燕Ⅰ段階は轡が立聞式であること、多條振り技法の銜をもつという特徴から高句麗Ⅱ～Ⅳ段階のどこかに併行するものと考えられる。さらに限定するなら、三燕Ⅰ段階に二孔式から立聞式への過渡期的資料が存在しないこと、高句麗Ⅳ段階にはすでに無振り技法b類が出現していることなどから、三燕Ⅰ段階は高句麗Ⅲ段階と併行する可能性が一番高い。三燕Ⅱ段階の筒金をもつ步搖付菊形飾金具や、步搖付半球形飾金具は、高句麗地域において型式変遷をたどることができ、高句麗地域ではⅣ段階に出現する^②。以上から三燕Ⅰ段階（四世紀中葉）は高句麗Ⅲ段階に、三燕Ⅱ段階（四世紀後葉～五世紀前葉）は高句麗Ⅳ段階におおむね併行すると考えられる。

それでは各段階の上限年代を詳しくみていこう。高句麗Ⅰ段階は一点しか資料がないため、上限年代は設けず、高句麗Ⅱ段階以前としておく。^{②③} 高句麗Ⅱ段階は、その指標となる立間式鏤轡が、高句麗地域では三世紀中葉―後葉頃に出現した可能性が高いことから、三世紀中葉以降としておく。「己丑（三一九）」年銘瓦当が出土した西大塚からは筒金をもたない歩搖付菊形飾金具が出土しており、高句麗Ⅲ段階は前燕建国を遡る四世紀前葉には始まっていたと考えられる。

高句麗Ⅳ段階の上限は千秋塚の年代に左右される。歩搖付菊形飾金具の変遷から千秋塚→太王陵という前後関係が設定され、瓦も同様の変遷が想定されることから、千秋塚の被葬者を太王陵の被葬者の先王と考えることができる。「丁巳（三五七）」年銘瓦当が出土した禹山下三三一九号墓から、筒金をもたない歩搖付菊形飾金具が出土していることから、高句麗Ⅲ段階の下限年代を四世紀中葉に求められる。よって、高句麗Ⅳ段階の千秋塚の被葬者は小獸林王（在位三七一一―三八四）か、故国壤王（在位三八四―三九一）に絞られる。

続く太王陵の位置付けは高句麗Ⅳ段階の下限とも関係する。太王陵出土馬具にそれ以前とは質量ともに大きな飛躍が認められること、太王陵の時期以降、定型性と差異性をあわせもつ裝飾馬具セットが高句麗地域で広く普及すると考えられていることなどから、筆者はその被葬者について在位期間の短い故国壤王よりは広開土王の可能性が高いと考えるが、比較対象となる千秋塚や將軍塚の馬具の実態が明らかでない以上、馬具のみからこの問題を解決することはできない。ただし、高句麗Ⅳ段階の本溪小市晋墓の位置する遼東一帯が、確実に高句麗の支配下に入るのは五世紀初頭以降と考えられていることや、^{②④} 太王陵や七星山九六号墓の鏤と北燕の馮素弗墓の鏤が、形態こそ異なるものの踏込鉞をもたない点で共通することを考慮すれば、太王陵の被葬者が誰であろうと、高句麗Ⅳ段階は五世紀初頭までは存続した可能性が高い。このⅣ段階に出現する鏡板轡をはじめとする各種裝飾馬具セットは、出現時期が先行する三燕地域との関係の中で成立したと考えられるが、その具体的な契機を明らかにするためにはもう少し資料の増加を待つ必要がある。

次の高句麗Ⅴ段階は、踏込鉞を備える鏤の出現によってⅣ段階と泰然と区別され、その上限年代が太王陵や馮素弗墓の

時期を大きく遡ることは難しい。よって五世紀前葉以降とすることができる。高句麗Ⅵ段階は高句麗が漢江流域一帯を支配した四七五年前後をひとまず上限とできる。すなわち五世紀後葉以降の時期が想定される。

① 【東一九八八】【魏存成一九九一】。

② 【吉林省文物考古研究所ほか一九九二、図版五一九】。

③ 【吉林省文物考古研究所ほか二〇〇四、図版四〇】。

④ 【秋山一九九五、三二三頁】。

⑤ 鏡板・環板轡C類は銜留金具をもたず、銜外環の突起や段差と引手の間に挟まれることによって固定される。

⑥ 立開を上に向けたとき、銜外環が横方向に連結される環板轡B類に該当するが、X字形銜留金具の環板轡B類は他地域にも類例がなく、発掘資料ではない点を考慮し、本稿ではその判断を保留する。

⑦ 報告書では同一個体としていないが、同じSGW2グリッドから出土しているため、同一個体として復元した。

⑧ 本溪小市晋墓例の図面には引手が表現されていないものの、一緒に報告されている「環形鉄釘」【遼寧省博物館一九八四】は二條線引手である可能性が高い。地境洞一号石室墓例は【朴正喜一九八六】では二條線引手a類が、【박정수一九八六】では二條線引手b1類が掲載されており、図面の信頼性に問題がある。本稿では少なくとも二條線引手であった可能性が高いと判断するにとどめる。

⑨ 馬具類は、「辛卯年」好大王 巫造鈴 九十六 銘銅鈴とともに墳丘南裾SG01トレンチから一括して出土した。報告者は、盗掘者が一時的に隠置したものがそのまま放置されたかとみている【吉林省文物考古研究所ほか二〇〇四、二三二頁】。

⑩ 【李道学二〇〇六】。

⑪ 【東二〇〇六】。

⑫ 【李熙濬二〇〇六】。

⑬ 【李熙濬二〇〇六】。

⑭ ただし、歩搖付半球形飾金具の出現以降も、歩搖付菊形飾金具の製作はしばらく継続するようである。

⑮ 高句麗地域で現在まで確認されている鉄製輪鍔や木心鉄板装壺鍔には踏込鍔を備えるものはない。しかし、鉄製輪鍔はいずれも柄部に比べて幅広の踏込部をもち、壺鍔も含め、広い踏込部を確保することによって、踏込鍔と類似した効果、すなわち騎乗時における身体の安定性を高めたと考えられる。

⑯ 【姜仁旭二〇〇六】。

⑰ 【山田一九七五】。姜は鉄製部分しか残っていないため誤認したようである。柄部から壺口までが鉄製で、壺口に木製の壺部をはめ込み、鍔で固定したものと考えられる。なお、桃崎も同様の指摘をしている【桃崎二〇〇八】。

⑱ 宋桂鉉や桃崎も、JC区の年代について既に同様の指摘をしている【宋桂鉉二〇〇五】、【桃崎二〇〇八】。

⑲ 高句麗地域の菊形飾金具にみられる筒金や心葉形歩搖は、三燕からの影響と考えられる。この時期に双方の馬具にそれぞれの影響がうかがえるのは興味深い。

⑳ ハクビ積石塚例の二條線引手b1類や二孔式棒形鍔、相伴する円形飾金具は、紀元前後の夫余の墓群とされる老河深遺跡中層からも確認されている。ただし、ハクビ積石塚例は多條振り技法と考えられ、無振り技法a類の老河深の轡とは銜製作技法が異なる。

㉑ 【諫早二〇〇七】。

㉒ かつては瓦の綱年から太王陵→千秋塚→將軍塚という変遷が想定さ

れていたが【田村一九八四】、【谷一九八九】、その後、正式報告や桃崎によって卷雲文瓦当と蓮蕾文瓦当の共伴する千秋塚から、蓮蕾文瓦当のみの太王陵・將軍塚へという変遷観が示されている【吉林省文物

考古研究所ほか二〇〇四】、【桃崎二〇〇五】。

②③ 【桃崎二〇〇五】。

②④ 【池内一九五一】、【武田一九八九】。

第四章 三燕・高句麗地域出土馬具からみた新羅地域出土馬具の製作年代

1 併行関係の検討

本章では朝鮮半島南部の中でも、三燕・高句麗地域出土馬具の影響を最も強く受けたと考えられる新羅地域出土馬具を取り上げ、その年代について検討する。李熙濬は月城路カ―一三号墳や皇南大塚南墳の馬具を中国東北地方の馬具と直接対比し暦年代を求めたが、本稿ではまず、筆者が以前に設定した朝鮮半島南部出土馬具の諸段階と三燕・高句麗地域出土馬具の諸段階との併行関係について検討してみよう。なお前稿では朝鮮半島南部三国時代Ⅰ―Ⅲ段階としたが、ここでは便宜的に新羅Ⅰ―Ⅲ段階と表記し、轡以外の馬具も考慮しながら検討を進めていく。

新羅Ⅰ段階は立聞式轡の出現を上限とする。銜の製作技法は多條振り技法である。よって三燕Ⅰ段階、および高句麗Ⅱ―Ⅳ段階との併行関係をまず想定できる。この段階のどこかで鏡板轡A類が出現する。三燕・高句麗地域では、鏡板轡の出現（三燕Ⅰ段階・高句麗Ⅳ段階）が、立聞式鑑轡の出現（高句麗Ⅱ段階）よりも遅れることから、朝鮮半島南部の轡にも同ような変化を想定するのであれば、新羅Ⅰ段階も鏡板轡A類の出現を基準に二分すべきであろう。Ⅰ段階前半は有機物製あるいは金属製の立聞式鑑轡のみ存在する時期である。鑑は共伴しない。百濟地域や加耶地域には類例が認められるが、新羅地域ではまだ確認されていない。Ⅰ段階後半になると鏡板轡A類が登場する。木心鉄板張輪鑑を共伴する例もわずかにみられる。新羅地域では慶州月城路カ―一三号墳の金銅製鏡板轡（図10―1）や、慶山林堂G―五・六号墳の鉄製鏡板

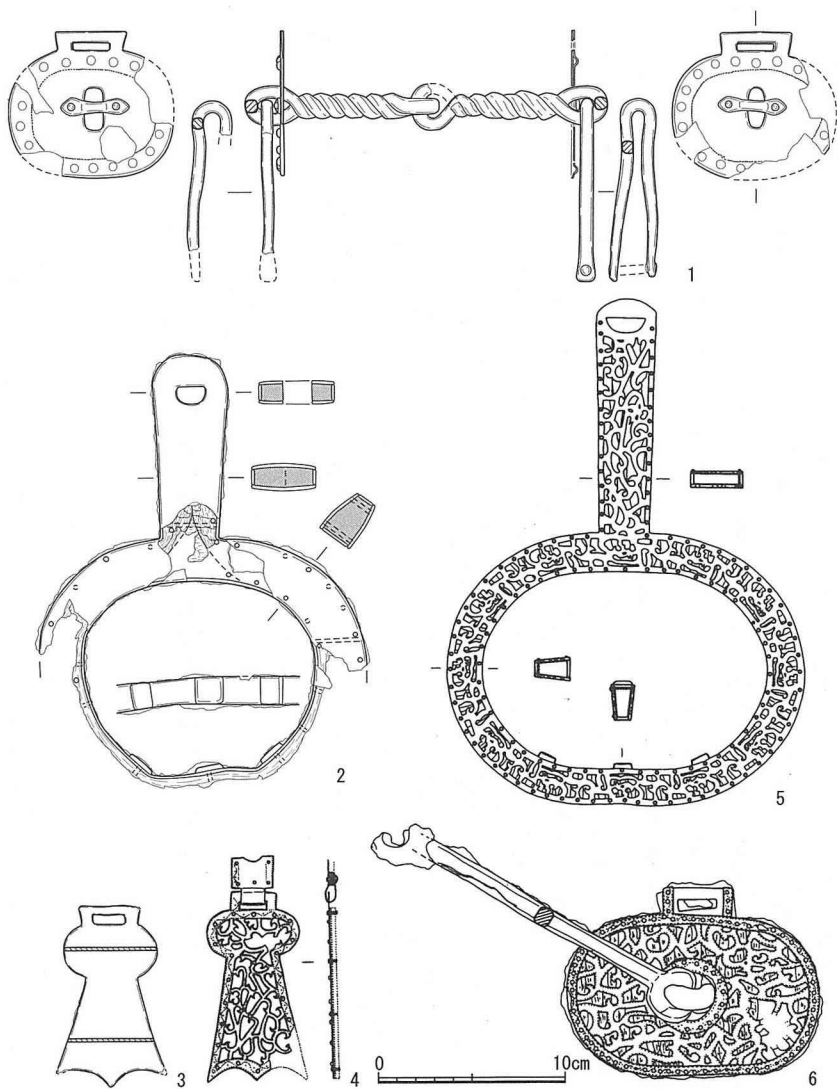


図10 新羅の各種馬具 (S=1/4)

1 : 月城路カ—13号墳 2・3 : 林堂7B号墳 4~6 : 皇南大塚南墳

轡などがこの段階に該当する。鏡板轡の出現を指標とするⅠ段階後半が、前燕で鏡板轡が出現する四世紀中葉を遡ることはない。

新羅Ⅱ段階は環板轡B類、無振り技法b類・一條振り技法b類の銜、一條線引手の出現する時期である。ⅠA式（無鉤）鐙や金属装鞍、心葉形杏葉と共伴する。鏡板轡A類の製作も継続する。慶州皇南洞一〇九—三・四号墳例（図12—9・10）などがこの段階に該当する。この段階に入ると三燕・高句麗地域にみられない要素（環板轡B類、一條振り技法b類銜、一條線引手）がかなり認められるようになる。しかし、一條振り技法b類の銜や一條線引手といった一見独自に見える要素は、一本の鉄棒の両端に環部を成形する点で、無振り技法b類の銜と密接な関係をもつ。環板轡B類もA類を祖形として成立したと理解されている。^② この段階の鐙が踏込鐙を備えないことも含め、新羅Ⅱ段階と三燕Ⅱ段階、高句麗Ⅳ段階はおおむね併行すると考えられ、その上限年代は四世紀後葉を遡ることはないだろう。

新羅Ⅲ段階は鏡板轡B類の出現する時期である。新羅独自の杏葉型式である扁円魚尾形杏葉（図10—3・4）もこの時期に出現する。環板轡B類の製作も依然継続している。慶州では皇南大塚南墳例（図10—6）が最初の鏡板轡B類と考えられる。鏡板轡B類は三燕や高句麗地域では今のところ確認されておらず、朝鮮半島南部と日本列島にのみ認められる鏡板型式であるが、どちらの地域においても基本的にⅠB式（有鉤）以降の鐙と共伴している。よって、新羅Ⅲ段階は高句麗Ⅴ段階以降と併行すると考えられ、その上限年代が五世紀前葉を遡ることはない。なお、前稿では鏡板轡B類をⅢ段階開始の指標としたが、三燕・高句麗地域には認められないため、広域編年の指標としては適していない。高句麗Ⅴ段階の指標をⅠB式（有鉤）鐙としたように、新羅Ⅲ段階の開始も踏込鐙を備える鐙の出現に求めることとしたい。^③

2 皇南大塚南墳の被葬者

現在、新羅古墳の相対編年は、研究者によって若干の差異はあるもののおおむね一致している。しかし、皇南大塚南墳

の被葬者を奈勿王（在位三五六―四〇二）とみるか、訥祇王（在位四一七―四五八）とみるかによって、その暦年代観は大きく異なっている。冒頭で触れたように太王陵出土馬具との比較から、被葬者問題の解決をはかる試みもみられたが、不安定な高句麗王陵の年代観に、新羅王陵の年代が依存するという構造は年代論を一層混乱させる原因となっている。筆者は前節で、皇南大塚南墳出土馬具を指標とする新羅Ⅲ段階は五世紀前葉を遡りがたいとしたが、新羅古墳の年代観とも関わる重要な問題と考えられるため、ここからはその理由について詳しくみていこう。

皇南大塚南墳出土馬具の中で最も注目され、またここでも注目したいのが鐙である（図10―5）。皇南大塚南墳の鐙のうち、踏込部の確認できるものは全て踏込鉤を備えている。何度も繰り返すが踏込鉤は高句麗地域にも認められ、新羅地域の踏込鉤も同地域からの強い影響を受けて出現したと考えられる。^⑥すなわち、新羅地域における踏込鉤の出現が高句麗地域とはほぼ同時であつても遡るということは考えがたい。この点において、桃崎説はもちろん、太王陵を四世紀末とし、皇南大塚南墳を五世紀初とする李熙濬の説も一見、問題無いようにみえる。しかし、新羅地域において踏込鉤は、皇南大塚南墳よりも土器編年上、先行する釜山福泉洞一〇・一一号墳例や林堂七B号墳例（図10―2）などのⅠA式鐙に認められる。つまり（太王陵の被葬者との没年差が短い）奈勿王説をとる場合、製作から副葬までの期間を意図的に調整しない限り、高句麗地域で踏込鉤が出現するよりも前に、新羅地域で踏込鉤が出現したことになってしまう。

このような問題は新羅Ⅰ段階後半、すなわち鏡板轡A類の出現についても同じように指摘することができる。李熙濬は中国東北地方の資料との比較から月城路カ―一三号墳出土の鏡板轡A類を遅くとも四世紀後半の初め頃とみた。前燕における鏡板轡の出現時期が四世紀中葉と考えられることから、そのような考えは一見成立するようにもみえる。^⑦しかし、新羅地域において鏡板轡A類は土器編年上、月城路カ―一三号墳に先行する林堂G―五・六号墳の段階で既に出現している。^⑧つまり、新羅地域における鏡板轡A類の出現時期が、前燕と同時かそれよりも先行してしまいかねないのである。

これまで年代決定資料として注目されてきた皇南大塚南墳の鐙や月城路カ―一三号墳の轡は、裝飾性の高さを除けば、

技術的にも機能的にも新羅地域から出土する他の資料となら変わらない。最も重要な点は、それらは同型式の資料の中で決して出現期の資料ではないことである。また、鏡板轡をはじめとする裝飾馬具セットが三燕地域で成立し、高句麗地域を経て新羅地域に入ったのであれば、三燕・高句麗地域でも確認される変化が新羅地域で最初に出現したとは考えにくい。以上から皇南大塚南墳の馬具は、五世紀前葉に遡る可能性は残しておくとしても、初頭にまでは遡りえず、その馬具をもつ被葬者は訥祗王と考えるのが妥当であろう。^⑨この訥祗王の治世の晩年は、それまで高句麗に従属していた新羅が「脱高句麗化」^⑩の動きを見せ始める重要な時期と評価されている。高句麗からの影響をみせつつも、扁円魚尾形杏葉や鏡板轡B類などからなる独自の裝飾馬具を創出していく新羅Ⅲ段階の様相はこれと符合する動きとして理解しうる。

① 【李熙溶一九九五・九六】。

② 【柳昌煥二〇〇〇】。

③ よって前稿【諫早二〇〇五a】よりもⅢ段階の上限は若干遡及する。

なお新羅地域では、高句麗地域で確認されるⅠB式（有銕）銕以外にⅠA式（有銕）銕が確認されている。

④ 【李鍾宣一九九二】、【李熙溶一九九五】など。

⑤ 【藤井一九七九】、【金龍星二〇〇三】など。

⑥ 【白井二〇〇三、一〇五頁】。

⑦ 李熙溶は、高句麗の年代観に従い、鏡板轡A類の出現時期を四世紀初め頃とみている【李熙溶一九九六、二九四頁】。

⑧ 【李熙溶一九九六、三〇五頁】。

⑨ 奈勿王と訥祗王の間に在位した実聖王（在位四〇二―四一七）は、次王の訥祗王によって殺害された点や、埋葬施設から出土した歯牙の

分析結果、被葬者が六十歳前後の男性と考えられている点から【張信堯・金遼澤一九九四】、皇南大塚南墳の被葬者候補から除外される。

⑩ 【井上二〇〇〇】。

おわりに

本稿では製作技術と機能という観点から、三燕、高句麗、新羅地域出土馬具の相対編年と併行関係の設定をおこなった。さらに紀年墓などの検討を通じて各段階におおよその年代を付与した。その結果、三燕、高句麗、新羅における馬具の技術的・機能的変化が、極めて短い時間のうちに伝達されたと考えることによって様々な事象が整合的に説明できることが明らかとなった。その成果をまとめたものが図11である。この年代を安易に墓の年代とすることは慎まなければならない

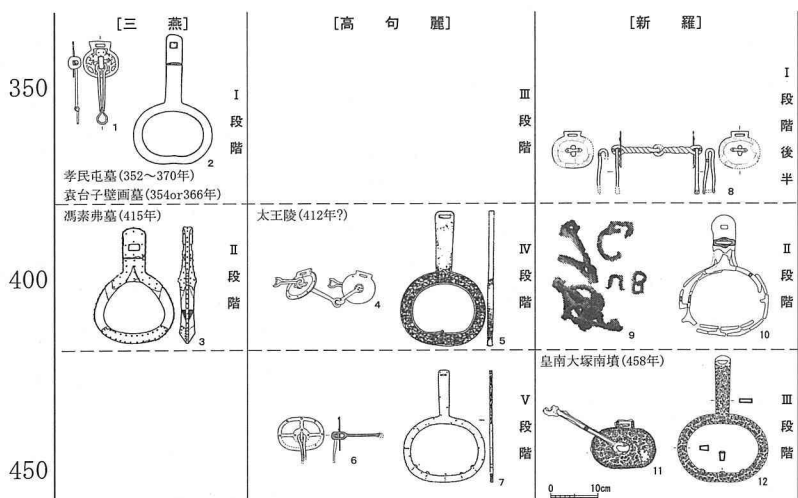


図11 東北アジア出土馬具の製作年代 (S=1/16)

1・2：孝民屯154号墓 3：馮素弗墓 4：七星山96号墓 5：太王陵 6・7：万宝汀78号墓 8：月城路カ-13号墳 9・10：皇南洞109-3・4号墳 11・12：皇南大塚南墳

が、暦年代観の不安定な新羅古墳にも、比較的精度の高い年代決定資料を提供するものと考えられる。

ところで、技術的・機能的変化が極めて短い時間のうちに伝達されたとしても、鏡板轡をはじめとする金や銀で彩られた裝飾馬具セットの成立時期には、三燕地域では四世紀中葉、高句麗地域では四世紀後葉～五世紀初頭、新羅地域では五世紀前葉～中葉と若干の時間差があったようである。すなわち、鏡板轡をはじめとする裝飾性の高い騎乗用馬具セットが前燕でまず成立し、高句麗、そして新羅でも順次製作されていく状況が鮮明に浮かび上がってくる。それぞれにおける製作開始は前燕の建国から中原進出にかけての時期や、新羅の「脱高句麗化」の開始といった各国の画期とおおむね対応することから、その背景には活発な地域間交流とともに製作主体としての各王権の政治的意図が強く反映されている。この問題に関しては今後の課題としておきたい。いずれにせよ騎馬文化の東漸現象については、ともすれば外的要因ばかりが注目されてきたが、それを受け取る側の内的状況を考慮することで、より豊かな歴史像を描き出せるだろう。

紙幅の関係で今回は検討できなかった百濟、加耶、倭からも

同じような形態的特徴をもつ馬具が多数出土しており、これらの地域についても同様の検討をすすめていくことで、東北アジア全体を繋ぐ広域編年網の樹立が可能となろう。それぞれ異なる年代根拠をもつ各地域の年代観を整理する上で、一貫した分析が可能な馬具がもつ重要性ははかりしれない。

参考文献

- 秋山進午編 一九九五 『東北アジアの考古学的研究』〔日中共同研究報告〕 同朋社出版
- 東潮 一九八八 「高句麗文物に関する編年学的一考察」『檀原考古学研究所論集』第一〇 吉川弘文館
- 東潮 二〇〇六 「高句麗王陵と巨大積石塚——国内城時代の陵園制——」『朝鮮学報』第一九九・二〇〇輯
- 穴沢味光 一九九〇 「五胡十六国の考古学・上」『古代学評論』創刊号
- 穴沢味光・馬目順一 一九七三 「北燕・馮素弗墓の提起する問題——日本・朝鮮考古学との関連性——」『月刊考古学ジャーナル』No. 85
- 池内宏 一九五一 「晋代の遼東」『滿鮮史研究』上世編 祖国社
- 諫早直人 二〇〇五a 「朝鮮半島南部三国時代における轡製作技術の展開」『古文化談叢』第五四集
- 諫早直人 二〇〇五b 「原三国時代における鉄製轡製作技術的特質」『朝鮮古代研究』第六号
- 諫早直人 二〇〇七 「製作技術と 土 夫餘の 轡斗 韓半島南部の 初期 轡」『嶺南考古学』第四三三三
- 井上直樹 二〇〇〇 「高句麗の対北魏外交と朝鮮半島情勢」『朝鮮史研究會論文集』No. 38
- 内山敏行 二〇〇五 「中八幡古墳出土土馬具をめぐる問題」『中八幡古墳資料調査報告書』 池田町教育委員会
- 小田富士雄 一九七九 「集安高句麗積石墓遺物と百濟・古新羅の遺物」『古文化談叢』第六集
- 小野山節 一九六六 「日本発見の初期の馬具」『考古学雑誌』第六五卷第一号
- 小池信彦 二〇〇六 「遼寧省出土の三燕の帶金具について」『東アジア考古学論叢』 奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所
- 国立歴史民俗博物館・釜山大学校博物館 二〇〇六 「日韓古墳時代の 暦年代観」
- 小林聡 一九八八 「慕容政權の支配構造的特質——政治過程の検討と支配層の分析を通して——」『東洋史論集』一六
- 白井克也 二〇〇三 「馬具と短甲による日韓交差編年——日韓古墳編年の並行関係と暦年代——」『土曜考古』第二七号
- 白石太一郎 一九八五 「年代決定論（二）——弥生時代以降の年代決定——」『岩波講座 日本考古学』一 岩波書店
- 武田幸男 一九八九 「高句麗史と古代東アジア」 岩波書店
- 田中由理 二〇〇四 「f 字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』第五一卷第二号
- 谷豊信 一九八九 「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察——墳墓発見の瓦を中心として——」『東洋文化研究所紀要』第一〇八冊
- 田村晃一 一九八四 「高句麗の積石塚の年代と被葬者をめぐる問題に

ついで「『青山史学』第八号

千賀久 一九八八 「日本出土初期馬具の系譜」『橿原考古学研究所論

集』第八 吉川弘文館

中條英樹 二〇〇七 「韓国・尚州新興里古墳群出土の鎧轡について

——最近の東アジア出土鎧轡の研究動向から——」『専修考古学』

第二号

花谷浩 二〇〇六 「三燕地域出土馬具について——鞍金具と轡を中心

に——」『東アジア考古学論叢』奈良文化財研究所・遼寧省文物

考古研究所

東アジア考古学会 二〇〇六 「第一八回東アジア古代史・考古学研究

交流会予稿集」

樋口隆康 一九七二 「鐙の発生」『青陵』No. 19 奈良県立橿原考古

学研究所

藤井和夫 一九七九 「慶州古新羅古墳編年試案——出土新羅土器を中

心として——」『神奈川考古』第六号

藤井康隆 二〇〇三 「三燕における帯金具の新例をめぐって」『立命

館大学考古学論集』Ⅲ—2—

町田章 二〇〇六 「鮮卑の帯金具」『東アジア考古学論叢』奈良文

化財研究所・遼寧省文物考古研究所

桃崎祐輔 一九九九 「日本列島における騎馬文化の受容と拡散——殺

馬儀礼と初期馬具の拡散に見る慕容鮮卑・朝鮮三国伽耶の影響——」

『渡来文化の受容と展開——五世紀における政治的・社会的変化の

具体相(2)』埋蔵文化財研究会

桃崎祐輔 二〇〇四 「倭国への騎馬文化の道——慕容鮮卑三燕、朝鮮

半島三国、倭国の馬具との比較研究——」『考古学講座 講演集』

(「古代の風」特別号 No. 2) 市民の古代研究会・関東

桃崎祐輔 二〇〇五 「高句麗太王陵出土瓦・馬具からみた好太王陵説

の評価」『海と考古学』六一書房

桃崎祐輔 二〇〇八 「古代山城出土馬具と馬具の見方」『第二回東ア

ジア考古学会・中原文化財研究院研究交流会 予稿集』

山田良三 一九七五 「古墳時代鐙の形態的変遷」『橿原考古学研究所

論集』吉川弘文館

魏存成 一九九一 「高句麗馬具の発現与研究」『北方文物』第四期

吉林省文物考古研究所・集安市博物館 二〇〇四 「集安高句麗王陵」

吉林省文物考古研究所・集安市文物保管所 一九九三 「集安洞溝古墓

群禹山墓区集錫公路墓葬發掘」『高句麗研究文集』

蕨高 一九九五 「公元三至六世紀 慕容鮮卑、高句麗、朝鮮、日本馬

具之比較研究」『文物』第一期

田立坤 一九九一 「三燕文化遺存の初步研究」『遼海文物學刊』第一

期(穴沢味光訳 一九九二 「三燕文化遺存の初步的研究」『古文

化談叢』第二七集)

田立坤 二〇〇二 「袁台子壁面墓的再認識」『文物』第九期

遼寧省博物館 一九八四 「遼寧本溪晋墓」『考古』第八期

遼寧省文物考古研究所 二〇〇二 「三燕文物精粹」

遼寧省文物考古研究所

姜仁旭 二〇〇六 「高句麗 鐙子の 発生과 유라시아 草原地帶로의

伝播에 대하여」『北方史論叢』第二号

姜賢淑 二〇〇六 「高句麗 古墳에서 보이는 中国 三燕 要素의 展開

過程에 대하여」『韓國上古史學報』第五一号

金斗喆 一九九三 「三国時代 轡의 研究」『嶺南考古學』第二二号

金斗喆 二〇〇〇 「韓國 古代 馬具의 研究」東義大学大学院博士

學位論文

金龍星 二〇〇三 「皇南大塚南墳の年代と被葬者検討」『韓国上古

史学報 第四二号

柳昌煥 一九九五 「伽耶古墳 出土 鍍子に 대한 研究」 『韓國考古学報』 第三三輯

柳昌煥 二〇〇〇 「環板轡의 編年과 分布」 『伽耶文化』 第一三号

柳昌煥（武末純一訳） 二〇〇四 「古代東アジア初期馬具の展開」 『福岡大学考古学論集——小田富士雄先生退職記念——』

박진옥 一九八六 「高句麗의 馬具에 대하여」 『朝鮮考古研究』 第三号

박창우 一九八六 「平城市 地境洞 高句麗무덤 發掘報告」 『朝鮮考古研究』 第四号

釜山大学校博物館・國立歷史民俗博物館 二〇〇七 「日韓古墳・三國時代の年代観（Ⅱ）」

宋桂鉉 二〇〇五 「桓仁과 集安의 高句麗甲冑」 『北方史論叢』 三号（高正龍・井上直樹訳 二〇〇六 「桓仁と集安の高句麗甲冑」 『朝鮮古代研究』 第七号）

申敬澈 一九八五 「古式鍍子考」 『釜大史学』 第九輯（定森秀夫訳 一九八六 「古式鍍考」 『古代文化』 第三八卷第六号）

李道学 二〇〇六 「高句麗 広開土王 碑文 研究」 『書景文化社』

李鐘宣 一九九二 「積石木槨墳의 編年에 대한 再論議」 『韓國古代史論叢』 第三輯

李熙溶 一九九五 「慶州 皇南大塚南墳의 年代」 『嶺南考古学』 第一七号

李熙溶 一九九六 「慶州 月城路가——三三号 積石木槨墓 年代意義」 『碩晤尹容鎮教授停年退任紀念論叢』

李熙溶 二〇〇六 「太王陵의 墓主는 누구인가?」 『韓國考古学報』 第五九輯

張信堯・金達澤 一九九四 「人骨에 對한 考察」 『皇南大塚（南墳）發掘調査報告書（本文）』 文化財研究所

張允植 二〇〇一 「朝鮮半島三國時代における鍍の展開と地域色」 『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』 第二二号

崔秉鉉 一九八三 「古新羅鍍考」 『崇實史学』 第一輯

崔秉鉉 一九九二 「新羅古墳研究」 一志社

図版出典

図1・3・6 筆者作成。

図2・諫早二〇〇五a、釜山大学校博物館一九八三「東來福泉洞古墳群Ⅰ」、慶尚大学校博物館一九九七「陝川玉田古墳群Ⅵ」をもとに作成。

図4・【薰高一九九五】于俊玉一九九七「朝陽三合成出土的前燕文物」『文物』第一期、田立坤・李智一九九四「朝陽發現的三燕文化遺物及相關問題」『文物』第一期、中国社会科学院考古研究所安陽工作隊一九八三「安陽孝民屯晉墓發掘報告」『考古』第六期、遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館一九九七「朝陽王子墳山墓群一九八七、一九九〇年度考古發掘的主要收穫」『文物』第一期、遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館一九九七「朝陽十二台鄉磚廠88M1發掘簡報」『文物』第一期、遼寧省博物館文物隊・朝陽地区博物館文物隊・朝陽縣文化館一九八四「朝陽袁台子東晉壁畫墓」『文物』第六期、遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所二〇〇四「遼寧北票喇嘛洞墓地一九九八年發掘報告」『考古学報』第二期。

図5・【遼寧省文物考古研究所二〇〇二】田立坤・李智一九九四「朝陽發現的三燕文化遺物及相關問題」『文物』第一期、中国社会科学院考古研究所安陽工作隊一九八三「安陽孝民屯晉墓發掘報告」『考古』第六期、遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館一九九七「朝陽十二台鄉磚廠88M1發掘簡報」『文物』第一期、遼寧省博物館文物隊・朝陽地区博物館文物隊・朝陽縣文化館一九八四「朝陽袁台子東晉壁畫

墓「文物」第六期、黎瑤渤一九七三「遼寧省北票縣西官營子北燕馮素弗墓」『文物』第三期。

図7・6—(国立中央博物館蔵。国立清州博物館一九九〇)「三国時代馬具特別展」一一頁を写真トレスしたものを資料実見の上、加筆修正。その他—【東一九八八】、【吉林省文物考古研究所ほか二〇〇四】

【遼寧省博物館一九八四】、【吉林省博物館文物工作隊一九七七】「吉林集安的兩座高句麗墓」『考古』第二期、吉林省集安縣文物保管所一九八二「集安万宝汀墓区二四二号古墓清理簡報」『考古與文物』第六期。

図8・1—筆者実測(ソウル大学校博物館蔵)。2・3—遼寧省文物考古研究所二〇〇四「五女山城」。

図9・【東一九八八】、【吉林省文物考古研究所ほか二〇〇四】、【遼寧省博物館一九八四】、朝鮮総督府一九三二「昭和七年度古蹟調査報告」第一冊、吉林省博物館文物工作隊一九七七「吉林集安的兩座高句麗墓」『考古』第二期、遼寧省文物考古研究所二〇〇四「五女山城」、高麗大学校博物館二〇〇五「韓国 Global Pride, 高句麗」, 서울大学校博物館二〇〇〇「峨嵯山 第四堡壘」, 鄭燦永一九六三「慈城郡照牙里、西海里、法洞里、松岩里 高句麗 古墳 發掘 報告」『各地遺蹟整理報告』。

図10・1—筆者実測(国立廣州博物館蔵)。2・3—筆者実測(嶺南大学校博物館蔵)。その他—文化財研究所一九九三「皇南大塚(南墳)發掘調査報告書」。

図11・8—筆者実測。その他—【吉林省文物考古研究所ほか二〇〇四】、朝鮮総督府一九三七「昭和九年度古蹟調査報告」第一冊、吉林省博物

館文物工作隊一九七七「吉林集安的兩座高句麗墓」『考古』第二期、中国社会科学院考古研究所安陽工作隊一九八三「安陽孝民屯晉墓發掘報告」『考古』第六期、黎瑤渤一九七三「遼寧省北票縣西官營子北燕馮素弗墓」『文物』第三期、文化財研究所一九九三「皇南大塚(南墳)發掘調査報告書」。

なお、紙幅の都合上、表や文中で引用した遺蹟の出典を割愛させていただいた。ご了承ください。

【謝辞】本稿は二〇〇四年度に京都大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部をもとに、その後の韓国留学による成果を加えたものである。修士論文の作成にあたっては上原真人先生、泉拓良先生、吉井秀夫先生に懇切なご指導を賜わった。留学期間中は慶北大学校考古人類学科の李白圭先生、李熙溶先生、朴天秀先生に様々なご教示を頂いた。成稿にあたっては吉井秀夫先生、向井佑介氏には草稿に目を通して頂き、大変有益なご教示を得た。最後に本稿作成にあたり、資料調査等で左記の方々に大変お世話になった。末筆ながら記して感謝申し上げます。

河野正訓、成舜燮、金大郁、金大煥、金銀珠、中條英樹、朴敬道、桃崎祐輔、李陽洙、梁時恩(敬称略・五十音順)

京都大学考古学研究室、慶北大学校考古人類学科、国立廣州博物館、国立中央博物館、国立大邱博物館、ソウル大学校博物館、嶺南大学校博物館

なお本稿は(財)松下国際財団アジアスカラシップ、及び日本学術振興会特別研究員奨励費(課題番号:二〇・二七三〇)の成果の一部である。

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

The Dates of the Manufacture of Horse Trappings in Ancient Northeast Asia: The Three Yan Kingdoms, Koguryo, and Silla

by

ISAHAYA Naoto

In recent years, it has been clearly recognized that the horse trappings excavated from sites from across ancient northeast Asia constitute a series of objects from the same lineage. However, there is no consensus on the mutual relationships of horse trappings excavated from each area or on their dates of manufacture. Therefore, this paper discusses the dates of manufacture of horse trappings excavated from the area composed of the Three Yan 三燕 kingdoms, Koguryo 高句麗 and Silla 新羅 from the standpoints of manufacturing technology and function.

First, I have made a relative chronology showing the mutual relations of each area. Secondly, based on absolute dates from such sources as tombs whose date is certain, I have assigned dates to each manufacturing stage. As a result, I was able to set an upper limit and thereby determined that the date of the horse trappings of Hwangnamudaechong Nambun 皇南大塚南墳 that have had a great influence on the dating of the Silla tombs, for which there are no securely datable artifacts, cannot date back to the beginning of the 5th century. Thus, I concluded that the owner of the horse trappings was King Nulgi 訥祗, who died in 458.

In addition, by indicating changes in manufacturing technologies and function over a broad area and across time, it has become possible to explain various phenomena in each area systematically in relation to those in others. Moreover, it has become clear that there was a time lag in the creation of the highly decorative sets of horse trappings, which included cheek-plate bits, in the Three Yan kingdoms, which took place in the middle of the 4th century, in Koguryo, which occurred from the late 4th century to the beginning of the 5th century, and in Silla, in the first half of the 5th century. As these dates conform to a turning point in the history of each country, I pointed out the possibility that this reflected not only active regional interactions but also the political will of each royal power.